

# 紹介・成蹊大学図書館所蔵『丹鶴叢書』

## 児 玉 千 尋

### 序

成蹊大学図書館は、江戸時代末期に水野忠央<sup>ただなか</sup>が刊行した『丹鶴叢書』全154冊のうち『和歌一字抄』2冊を欠く152冊を所蔵している。一機関でこれだけの数を所蔵しているのは、宮内庁書陵部、福井県立図書館松平文庫、竜門文庫、大阪天満宮の4カ所に限られている<sup>(註1)</sup>。本学のコレクションには重複本が多く、中には5部あるものもあり、実際の冊数は407冊にのぼる(表1参照)。そのような日本有数のコレクションを研究に有効活用できるように、資料の来歴などを紹介する。

### 1. 丹鶴叢書とは

丹鶴叢書とは、幕末に紀州新宮<sup>しんぐう</sup>の城主水野忠央が編んだ国書の叢書である。水野忠央は紀伊国新宮三万五千石の城主で、江戸定府の紀州藩附家老職にあり、吉田松陰をして「水野は奸にして才あり」<sup>(註2)</sup>と言わしめた人物である。井伊直弼と結託して、14代將軍の座を主君である紀州徳川家にもたらし。一方では、文武奨励し、洋式軍隊を範とした軍制改革や学問振興を行った。忠央自身、学問を好み、藩校の督学山田<sup>つねのり</sup>常典や小中村<sup>こなかむらきよのり</sup>清矩・黒川<sup>まより</sup>真頼・白井嘉一・柳河<sup>しゅんさん</sup>春三らと漢洋の各専門家の協力で、稀覯書を収集し、約4万点に及ぶ蔵書を保有していた。丹鶴叢書は、この蔵書をもとに村田<sup>はるの</sup>春野・仲田<sup>あきただ</sup>顯忠らの蔵書も加えて、山田常典らを用いて、歌集・物語・日記・記録・行事・縁起・図録などを翻刻させたものである。叢書名は、新宮城の別称丹鶴城に因んで名付けられた。弘化4(1847)年より嘉永6(1853)年にかけて刊行された。当初、1000巻を目指したが経費がかさみ、桜田門外の変後、忠央の失脚とともに刊行は途絶えた<sup>(註3)</sup>。現存部数は少なく、この後の幕府の瓦解とともに、水野家の蔵書も散逸し、叢書の全容がつかみにくなっている。叢書の総数には諸説あるが、今回は書誌学者川瀬一馬の書目に従う<sup>(註4)</sup>。

7帙154冊の構成で、各帙は刊行年の干支を採って、それぞれ丁未(弘化4年)・

註1 広瀬順皓(2005)「大名家・藩校の典籍と記録(4) 貴族院議員水野直と丹鶴叢書」『日本古書通信』70(5), p.24-25

註2 広瀬(2005)

註3 国史大辞典編集委員会編(1979-1997)『国史大辞典』吉川弘文館

註4 川瀬一馬(1943)「『丹鶴叢書』に就いて」『日本書誌学之研究』大日本雄弁会講談社, p.1786-1794

戊申（嘉永元年）・己酉（嘉永2年）・庚戌（嘉永3年）・辛亥（嘉永4年）・壬子（嘉永5年）・癸丑（嘉永6年）の名称が付いている。表紙は丁子染に鶴の丸紋入り、山田常典の板下による精美的な版刻本で、後述する校正本により厳正な校訂が行われたことで知られている。

その版木は良質のものであったために、明治年間に国定教科書の版木に改刻されてしまったという。『日本書紀』の版木は徳富蘇峰が手に入れて、民友社より出版したが、関東大震災により焼失してしまった<sup>(注5)</sup>。また、書店磯部屋は、ある本屋から「丹鶴叢書」の版木だけを買って潰してしまい、「丹鶴図譜」の版木だけは模様があるからもったいないと、火鉢にこしらえさせたという<sup>(注6)</sup>。このような不運な運命をたどった版木の一部は、現在静嘉堂文庫に収蔵されている<sup>(注7)</sup>。

## 2. 刊記

丹鶴叢書のように、地方各藩の藩主または藩校が出版した書物を藩版という。藩版について、『日本古典籍書誌学辞典』では次のように説明をしている。

諸藩の藩主や藩校の出費によって刊行された出版物。費用は藩が負担するが、実際の出版に関する作業や実務は、多くはその藩と関わりのある書肆が行うのが通例だが、中には藩士や一般人を技術者として養成して行う場合もある。…享保（1716-36）以前は書物のどこにもその旨を表記せず、奥付なども付けないものが多いが、享保以降は見返しや奥付に「〇〇藩蔵版」といった蔵版記や印記を以て示す例が多くなる。また、初めは藩版として刊行しておいて、後にはその版木を製作者である板元に下げ渡して、その店の刊行物として、奥付にもその書肆名を表して売り出す例も少なくない<sup>(注8)</sup>。

成蹊大学で所蔵している丹鶴叢書を見ると、同じ題名の本で刊記があるものと、ないものがある（表1参照）。刊記があるものには、全て書肆名が記されているので、これらは民間の書肆が発売して一般に流通させた町版であることが明らかである。刊記の無いものは、『日本古典籍書誌学辞典』にあるように、藩版として出版されたものと考えられる。

例えば上中下巻のように3分冊で出版されると、最終巻にのみ刊記をつけることがあるが、407冊中最終巻にかかわらず無刊記のものが64冊、刊記があるものは29冊あった。刊記には2種類見られ、「丹鶴城蔵梓／売弘所／三都書肆」までは共通だが、4軒の書肆のうち1つが異なり「京都三条通升屋町／出雲寺文次郎、大阪心齋橋通安堂寺町／秋田屋太右衛門、江戸芝明神前／岡田屋嘉七、同鍛冶橋五郎兵衛町／中屋徳兵衛」と丹鶴叢書の叢書目録が付いているものと、「京都三条通升屋

注5 川瀬（1943）

注6 反町茂雄（1990）『紙魚の昔がたり明治大正篇』八木書店、p.95

注7 広瀬（2005）

注8 中野三敏（1999）「藩版」『日本古典籍書誌学辞典』井上宗雄ほか編著、岩波書店、p.474

町 / 出雲寺文次郎、大阪心齋橋通久太郎町 / 河内屋喜兵衛、江戸芝明神前 / 岡田屋嘉七、同鍛冶橋五郎兵衛町 / 中屋徳兵衛」で叢書目録がないものがある。秋田屋を含む刊記のものが15冊、河内屋を含むものが14冊ある。河内屋とある本は後半の帙に多く見られるため、叢書刊行途中のある時期に秋田屋から河内屋へ交代したように見えるが、『辛亥帙 日本書紀二』では秋田屋を含む刊記を持つ本と河内屋を含む刊記を持つ本の両方が存在し、交代も行われたかもしれないが、後印もしていたことが分かる。

### 3. 校正本

#### (1) 校正本とは

『日本古典籍書誌学辞典』<sup>(注9)</sup>では、「校正」という語について2種類の用法が説明されている。

本文の異同を比較して誤りを正すこと。また版本や活字本の出版に際して、本文の誤刻や誤植等を原稿と比較し正す作業をいう。…版本や活字本の出版に際して、校正をするために最初に刷り出される本文を校正刷(摺)りと称し、校正した本文を一冊に綴じたものを校正本という。

つまり、出版者が本の出版に際して、原稿と版との相違を修正する、現代のゲラ刷りにあたるものと、複数の版を比較する校勘の意味とがある。ここで取り上げるのは、版木の修正を指示する記述が書き込まれている校正本の方である。

#### (2) 他館所蔵の丹鶴叢書校正本

丹鶴叢書の校正本の存在は以前から知られており、いくつかの資料に松井簡治旧蔵、現静嘉堂文庫所蔵の『萬代和歌集』の校正本についての記述がみられる。川瀬によれば<sup>(注10)</sup>、「其の精刻に対する注文が言語に絶する程の嚴重を極めたことは、松井簡治博士所蔵(今、静嘉堂文庫所蔵。)の丹鶴叢書の校正刷の注意書に據つて充分に伺はれる。」と、非常に厳しい校正が行われていたことで知られている。

東京大学図書館には、『九條家車図』の校正本が所蔵されている。企画展示で公開された様子をインターネットで見ることができる。南葵文庫に含まれるもので、丹鶴叢書の編者水野忠央の息子である水野忠幹<sup>ただもと</sup>から、南葵文庫に寄贈されたものである<sup>(注11)</sup>。

同様に鶴見大学図書館には『しのびね物語』の校正本がある。インターネットで画像は見ることができないが、図書館のホームページに展示をした際の説明文が掲

注9 小森正明(1999)「校正」『日本古典籍書誌学辞典』井上宗雄ほか編著, 岩波書店, p.199-200

注10 川瀬(1943)

注11 知の職人たち-南葵文庫に見る江戸のモノづくり 27. 九條家車図

[http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai2006/shiryu\\_03.html](http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai2006/shiryu_03.html)

載されている<sup>(注12)</sup>。

また、国文学研究資料館の「所蔵和古書・マイクロ／デジタル目録データベース」を見ると、『今昔物語集』に、成蹊所蔵の校正本と同様の版木屋・彫り師と推定される印記が見られる。白黒の画像のため判別しがたいが、おそらくこの『今昔物語集』も校正本であろう<sup>(注13)</sup>。

### (3) 成蹊大学所蔵の校正本

成蹊大学所蔵の校正本にも、東京大学所蔵のものと同様に南葵文庫の印が見られる。来歴については後述するが、水野忠幹から出たものであろう。

『室町殿春日詣記』『侍中群要』『東大寺要録』の3種類、15冊に校正の書き込みが見られる(図1-3参照)。字の間違いや追加の頭注などが細かく指示されており、修正して刷り直した紙片を修正箇所の上に添付している。後の版を見ると、修正が反映されていることが分かる。『東大寺要録一』では、表紙の裏に「再校了 落成入字済」と書かれた紙が貼られている。校正の朱を入れて、入木をして版木を直し、修正した文字を印刷し、その修正箇所の上に添付し、もう1度校正を行ったものであろう。

毎丁ののど下部には「飯田刻」、「㊥篤尚堂」の印が押されている(図4参照)。前述の東京大学のサイトでは「各丁表の匡郭外に捺された朱印(「飯田刻」、「㊥篤尚堂」)は板木屋・彫刻師のものであろうと思われる。一冊の本の原稿が複数の彫り師のもとにわたっていたこともこれらの情報から予想される」、鶴見大学では「ノドの部分には刻工名(版木を彫った人物)の印が捺されています」と説明されている。彫り師に関する研究は少なく、このように彫り師の印が捺されるものなのか、明確に説明している研究を見つけることはできなかったが、今回は板木屋・彫り師の印であると仮定して論を進めていく。

#### ①印

ほぼ全ての丁に「飯田刻」か「㊥篤尚堂」のどちらかの印が捺されている(表2参照)。また、その印とともに、「多」「金」などの1文字の印も押されている。この1文字の印と「飯田刻」「㊥篤尚堂」の印の関係は、表2に示すように固定的である。例えば「多」は「飯田刻」としか現れず、「金」は「㊥篤尚堂」としか現れない。「飯田刻」は、「與」「己」「多」「紋」「卜」「三」「伊」「〇」の8種類の1文字印とともに現れ、「㊥篤尚堂」は「金」「水」「瀧」「安」「谷」「榮」の6種類の1文字印とともに現れる。これらの印を、板木屋・彫り師の印であると仮定すると、

注12 <http://library.tsurumi-u.ac.jp/library/tenji/129kaidai.pdf#search=%E5%BE%B3%E5%A F%8C%E8%98%87%E5%B3%B0+%E4%B8%B9%E9%B6%B4>

注13 [http://base1.nijl.ac.jp/iview/Frame.jsp?DB\\_ID=G0003917KTM&C\\_CODE=YA0-036-001-003-001](http://base1.nijl.ac.jp/iview/Frame.jsp?DB_ID=G0003917KTM&C_CODE=YA0-036-001-003-001)

2種類の版木の彫刻を請け負う板木屋「飯田刻」「㊦篤尚堂」と、それぞれがかかえていた彫り師が1文字印であるように見える。それぞれの彫り師が担当した丁に印を捺したのであろう。

彫り師の名前は、中国の宋元版などでは版心に刻み込まれる場合があるが、日本ではそうした例は少なく、享保頃から奥付に彫り師の名前が現れるようになったという<sup>(注14)</sup>。版木に名前を彫り込むのならば、担当者を明記できるが、このように版木を彫り上げて、刷りに回して、その刷り上がったものに、それぞれの印を捺すとは、どのような手順で行ったものか不明である。丸山季夫の『<sup>すえお</sup>刻師名寄』<sup>(注15)</sup>のように彫り師の署名を集めた研究もあるが、丹鶴叢書の1文字印からは彫り師の名前を突き止めることはできなかった。

彫り師をかかえていたと考えられる「飯田刻」「㊦篤尚堂」であるが、「㊦篤尚堂」は丹鶴叢書の刊記に現れる「江戸鍛冶橋五郎兵衛町 中屋徳兵衛」の屋号と一致する。中屋徳兵衛は、刊記の左端に記載されていること、『大日本近世史料市中取締類集』に見られる丹鶴叢書売弘願の願人が「五郎兵衛町家主 書物屋 徳兵衛」となっていることから、刊行の中心的な役割を担っていたことが分かる。この印により彫刻の段階から関わっていた可能性が強まった。

国書刊行会から復刻された丹鶴叢書の緒言には「この書の校訂彫刻をなしたる處は、今の東京牛込區浄瑠璃坂と長延寺谷との間にありし水野家の邸」<sup>(注16)</sup>とあり、複数の資料で水野家で彫刻されたと書かれている。中屋徳兵衛らが彫り師を水野家に送り込んだものか、詳細は不明である。

もう一方の「飯田刻」は不明である。『近世書林板元総覧』<sup>(注17)</sup>の中屋徳兵衛の項目を見ると「新宮水野家の丹鶴叢書を、岡田屋嘉七と合刻する」とあり、この記述が何を根拠とするのか分からないが、岡田屋嘉七に関わる板木屋であったか。

## ②分担

この「飯田刻」「㊦篤尚堂」の印で奇妙な特徴がある。それは、1冊の本の中で「飯田刻」と「㊦篤尚堂」の担当が何度も交代するのだ。2つの店で分担して版木を彫るならば、版木の原稿である版下を真ん中の丁から、前半後半で2つに分けるのが合理的であるように考えられる。しかし、例えば『東大寺要録三』では、1-8丁が「飯田刻」、9-14丁は「㊦篤尚堂」、15-19丁は再び「飯田刻」に戻り、20-26丁は「㊦篤尚堂」となっている。1冊の本を複雑に2つの店に分けているが、合計数は全26丁で「飯田刻」13丁、「㊦篤尚堂」13丁と綺麗に2等分になっている。厳密に2等分に分けており、『侍中群要』では1冊目は全58丁の内、「飯田刻」29丁、

注14 中野三敏(1999)「彫り師」『日本古典籍書誌学辞典』井上宗雄ほか編著、岩波書店、p.527

注15 丸山季夫(1982)「刻師名寄」『国学者雑攷』別冊、吉川弘文館

注16 赤堀又次郎(1914)『丹鶴叢書』国書刊行会、p.3

注17 井上隆明(1998)『改訂増補近世書林板元総覧』青裳堂書店

「㊥篤尚堂」29丁。2冊目は、全40丁で「飯田刻」31丁、「㊥篤尚堂」9丁と2等分のバランスが崩れたかに見えるが、3冊目が全39丁で「飯田刻」9丁、「㊥篤尚堂」30丁と、2冊合わせると調度等分となっている。

『東大寺要録七』『東大寺要録八』では、「飯田刻」の印のみで、「㊥篤尚堂」は出てこない。校正本『東大寺要録七』は全16丁で、表示されている丁数は1-14、29、32（止め）と飛んでいる。『東大寺要録八』でも、全18丁で、丁数は1-12、31-36（止め）と間が抜けている。これは、校正本でない刊本を見ると、実際の丁数は『東大寺要録七』全32丁、『東大寺要録八』全36丁で、校正本はちょうど半分の丁が足りないことが分かる。おそらく、「飯田刻」「㊥篤尚堂」どちらかの事情で、提出期限に間に合わなかったのか、やむなく片方の分だけを1冊に仕立てて、校正に回したのだろうか。今後の研究を待ちたい。

『室町殿春日詣記』のみは、1文字の印はなく、「若闌」の印が「飯田刻」や「㊥篤尚堂」とともに捺されていて、他の校正本の印と性格を異にする（図5参照）。「飯田刻」「㊥篤尚堂」両方の印と現れるので、彫り師ではなく、校正に関わる印であったか。

#### 4. 売弘願

この他に、丹鶴叢書にかかわる資料として、売弘願がある。時代によって出版販売の流れは変化があるが、天保の改革以降、出版したい本の内容に関して許可を得るための開板願と、その後に書肆が販売する際の許可を得るための売弘願というものが存在した。

『大日本近世史料 市中取締類集 書物錦繪之部 19-21』<sup>(注18)</sup>には、丹鶴叢書の売弘願が5件掲載されている（表4参照）。戊申（嘉永元年）、己酉（嘉永2年）、庚戌（嘉永3年）、辛亥（嘉永4年）に該当する本が含まれる。全てが「五郎兵衛町家主 書物屋 願人 徳兵衛」篤尚堂中屋徳兵衛の名前で出されている。前述のように、刊記の一番左に現れ、また、校正本の印にも現れた書肆である。

「『新宮城書蔵目録』と『丹鶴叢書』と」<sup>(注19)</sup>では、刊年に1年のずれが見られると指摘している。これは、出版年を示すと考えられている帙名、戊申（嘉永元年）の売弘願第285、292件は嘉永2年5月と6月に、己酉（嘉永2年）の売弘願第160件は嘉永3年10月に、庚戌（嘉永3年）の売弘願第207件は嘉永4年12月に、辛亥（嘉永4年）の売弘願第234件は嘉永5年9月に出されていることを指していると考えられる。この論文では、第285、160件に関してしか触れられていないが、今回発見した5件4帙全てが1年ずれている。

注18 東京大学史料編纂所編（1990-1994）『大日本近世史料 市中取締類集 書物錦繪之部 19-21』東京大学出版会

注19 安藤 菊二、朝倉 治彦（1952）「『新宮城書蔵目録』と『丹鶴叢書』と」『典籍』3, p.1-9

國書刊行會が復刻した丹鶴叢書『故實』<sup>(注20)</sup>に載っている「水野土佐守年譜」を見ると、戊申（嘉永元年）は嘉永2年4月に、己酉（嘉永2年）は嘉永3年7月に幕府に献上されたとあり、売弘願よりも前に献上されたこととなる。売弘願の願人が中屋徳兵衛であることを考え合わせると、これらの売弘願は町版に対するもので、それ以前に藩版の分は頒布されていたのだろう。

更に、『新宮城書藏目録』と『丹鶴叢書』と<sup>(注21)</sup>では、「書目中刊本の無きものがあり、冊数が又異なつてゐる」という疑問を呈している。確かに、刊行されたものとの相違が多い。

例えば、戊申帙は第285、292件に分けられて、嘉永2年5月と6月に提出されているのだが、刊本では1冊に合冊されている『釋奠供物圖・諸寮雜事注文』は、第285件と第292件に別々に申請されている。『諸寮雜事注文』は1冊で出されているが、『釋奠供物圖』の方は『拵弓藤割次第』と合わせて1冊の形である。しかし、『拵弓藤割次第』は刊本では、『拵弓藤割次第・諸鞍日記』と合冊されており、本来一緒のはずの『諸鞍日記』は、第285件と第292件のどちらにも見当たらず、今回調査したどの売弘願にも現れていない。また、刊本では独立して1冊ずつである『九條家車圖』『西園寺家車圖』は、合冊されて1冊で提出されている。更に、己酉帙では、『信實朝臣集』とともに刊本では存在しない『兼澄集清慎集』が合冊されて提出されている。これは、売弘願以前に藩版は頒布されているとする仮説とも相容れず、説明がつかない。これ以外にも、刊本との冊数の相違が多い。多くのものは、10巻4冊で刊行したものを、巻ごとに10冊に分けて提出したようだと予想がつくものであるが、己酉帙の『草根集』では、刊本は15巻15冊であるのに16冊が提出されている。どのような理由があったのであろうか。

## 5. 来歴・旧蔵者について

### (1) 水野直<sup>なおし</sup>

この叢書は昭和26（1951）年に水野勝邦より寄贈された。勝邦の父である水野直が集めたものである。

水野直は、明治から昭和時代前期にかけての政治家であった。丹鶴叢書を編纂した水野忠央の長子忠幹<sup>ただもと</sup>の五男として明治12（1879）年に生まれ、旧下総結城藩主水野家の養子となり家督を継いだ。昭和4（1929）年51歳で亡くなっている。収集の経緯は、水野勝邦の長女上田和子「丹鶴草書をめぐって」<sup>(注22)</sup>に詳しい。「結城水野家の家督を継いだ直は、帝大を出て貴族院に入り、研究会の領袖として活躍するに至った。政界での地位が高まるにつれ、幼くして去った実家への思い入れが強まり、祖父忠央が編纂、その後散逸していった丹鶴草書を手元におこうと収集に着

注20 早川純三郎編輯（1914）『丹鶴叢書 故實』國書刊行會

注21 安藤、朝倉（1952）

注22 上田和子（1989）「丹鶴草書をめぐって」『聖心女子大学史学部 OG 会報』23, p.31-35

手する」とある。

昭和初年には、紀州徳川家の徳川頼貞よりきだに依頼して、南葵文庫に含まれた丹鶴叢書 152 冊を譲り受けた<sup>(注 23)</sup>。同じ本が重複して 5 部あるものもあるので、これ以外にも手に入れる機会があれば熱心に収集したようである。

## (2) 南葵文庫

南葵文庫とは、麻布飯倉（東京都港区）にあった紀州徳川家の当主徳川頼倫よりみちを館長とする私設図書館で、頼倫が欧米漫遊の際に海外の図書館に深く感じて、家蔵書籍 2 万冊を基に明治 35（1902）年に開設された。紀州の「南紀」と、徳川家の家紋である「葵」をかけた命名である。当初は旧紀州藩士の子弟・関係者にのみ開放された。これ以後、収蔵書の増加とともに文庫の規模も拡張を続け、明治 41（1908）年には新館が完成し、あらためて図書館が公開された。以降も寄贈または購入によって、諸名家の集書が収取された。代表的なものに有職故実家坂田諸遠旧蔵の「坂田本」、国学者で『古事類苑』の編纂に関与した小中村清矩旧蔵の「陽春廬本やすむろ」などがあり、大正半ばには蔵書数 12 万に上っている。

大正 12（1923）年の関東大震災により全焼した東京帝国大学付属図書館復興のため、南葵文庫が所有するほとんどの資料を東京帝国大学附属図書館に寄贈することを発表した。以後、大正 13（1924）年 7 月に譲渡手続きが終了した時点で組織としての南葵文庫は消滅し、その資料は東京帝国大学附属図書館の所有となった。

紀州徳川家は、丹鶴叢書を編纂した新宮水野家の主君にあたり、水野忠央は丹鶴叢書を刊行してすぐに献上している。また、明治 33（1900）年 9 月には、水野忠央の長子忠幹が南葵文庫に 151 冊寄贈した記録が残っているという<sup>(注 24)</sup>。このように、南葵文庫の丹鶴叢書は複数の来歴をもち、かなりの数の複本が含まれていたようだ。

水野直は、前述のように昭和初年に南葵文庫より、丹鶴叢書を譲り受けているが、この際に様々な来歴のものが混ざった状態で受け取ったようである。資料によれば、水野直は南葵文庫より 152 冊譲り受けたと書かれているが<sup>(注 25)</sup>、現在の成蹊大学のコレクションでは南葵文庫の印は 136 冊（もう 1 冊印はないが、南葵文庫のラベルが添付されているものがある）であった。南葵文庫の水野忠幹男爵寄贈と記された蔵書票は 1 枚のみであったが、東京大学の校正本も水野忠幹から南葵文庫に寄贈されたものであることを考えると、成蹊大学が所蔵する校正本も水野忠幹からの寄贈であろう。「新宮城書蔵」、「丹鶴書院」の印も水野忠央の蔵書印であり、忠幹からのものであろう。

注 23 山本秋広（1970）『わたしのふるさと紀州 紀山文集第 14 巻』紀南新聞社、p.363-367

注 24 上田和子（2006）「水野直覚え書き」『水野直子を語る 水野直道憶座談会録 尚友ブックレット憲政資料シリーズ 19』尚友倶楽部、p.397-403

注 25 山本（1970）p.365

「南葵文庫」印とともに「紀伊國學所印」が捺されているものもあり、紀州徳川藩の藩校に所蔵されていたものとわかる。徳川頼倫の印「舊和歌山徳川氏蔵」も見られる。

「陽春廬記」印は、山田常典とともに丹鶴叢書の編纂に携わった小中村清矩の蔵書印で、南葵文庫に収蔵された小中村清矩の旧蔵書からのものであろう。丹鶴外書『大系図畫引便覧』には、同様に旧蔵書が所蔵された坂田諸遠の蔵書印「坂田文庫」が見られる。

南葵文庫は大正13年には活動を終了しており、その後、昭和初年に直は丹鶴叢書を譲り受けている。反町茂雄<sup>(注26)</sup>の著書には、昭和2(1927)年と9(1934)年に行われた紀州徳川家蔵書の売り立てについて書かれており、南葵文庫は全て東京大学に寄贈されたわけではなく、特に愛着のあったものは紀州徳川家に残っていたようである。

### (3) 水野忠幹

水野直の父、水野忠幹は天保6(1835)年に、丹鶴叢書を編纂した水野忠央の長男として生まれる。父忠央の失脚により、万延元(1860)年家督を継ぎ、紀伊和歌山藩付家老、新宮城主として藩主徳川茂承を補佐した。慶応4(1868)年朝廷の命で大名とされ、独立して新宮藩主となる。しかし、廃藩置県によりその地位は長くは続かず、明治期には木材問屋を営んでいた。明治35(1902)年には嫡男宣を八甲田山の行軍中に亡くし、後を追うように明治35(1902)年4月30日68歳で死去している。

前述のように、水野忠幹は南葵文庫に明治33(1900)年9月に151冊寄贈した記録が残っているという<sup>(注27)</sup>。この頃の状況は、上田和子「丹鶴草書をめぐって」<sup>(注28)</sup>に詳しい。「明治十年位までの間に、江戸藩邸は書院ともども取りこわされ、所蔵本も散逸していったと思われる。…明治30年頃には、忠幹夫妻は鎌倉西御門の高松寺(水野家菩提寺)内に、藩邸とは比べようもない小さな邸を建て、隠居のように暮らしていた。」

書肆の朝倉屋はその頃の水野家から蔵書を引き取っている<sup>(注29)</sup>。

朝倉屋：私共で頂戴したその時分のお払い物の内で、一番多かったのは紀州新宮の水野家、御存じの丹鶴叢書の御邸でした。御蔵書の中で、善本だけは私共で宮内省へ伺って評価し、その分はそっくり献上なされ、残本だけ戴いたのでした。ちょうど明治十五年の九月の事でした。それでも当方で二千円位でござ

注26 反町茂雄(1986)『一古書肆の思い出2買を待つ者』平凡社, p.105-109

(1986)『蒐書家・業界・業界人』八木書店, p.171-72

注27 上田(2006)

注28 上田(1989)

注29 反町茂雄(1990)『紙魚の昔がたり 明治大正篇』八木書店, p.94-97

いましたろう。和書のいずれも立派なものばかりですが、何分にも当時の事とて利益の方はそれ程でもありませんでした。

反町：どの位あったのですか、車に何台位ですか。

朝倉屋：ずいぶん嵩がありました。丹鶴叢書の残本一つの種類だけでも何部となくあったのですから…

南葵文庫に含まれた校正本は、忠幹から出たものだと考えられる。鶴見大学などの所蔵する南葵文庫印のない校正本や、南葵文庫以外の無刊記本は、このようにして流出したものでしょうか。

現在の成蹊のコレクションには、水野忠央の印として知られる「丹鶴書院」印を捺されたものが37、「新宮城書藏」印が24見られるが、このうち2冊は「南葵文庫」印はなく別ルートから直のもとに入ったようだが、それ以外は全て「南葵文庫」印がある。

## 6. おわりに

成蹊大学図書館の丹鶴叢書は、所蔵数が407冊と国内屈指のコレクションであり、資料として残りにくい貴重な校正本も15冊所蔵している。校正本には、版木屋、彫り師と考えられる印が捺されており、複雑な分担がなされていたことが明らかとなった。成蹊大学のコレクションは、編纂者水野忠央の孫である水野直が収集したもので、様々な来歴のものを含んでいた。校正本は、水野忠央の息子忠幹が徳川頼倫に寄贈し、南葵文庫に入っていたものを、直が譲り受けたものと考えられる。

現存部数の少ない丹鶴叢書の校正本、藩版、町版、町版の後印本が一カ所に集まっている点も比較研究に有効である。今後の研究により、その価値がさらに明らかになるであろう。

付録：その他の印記<sup>(注30)</sup>

成蹊大学所蔵の丹鶴叢書に見られる印記に関して、水野家や南葵文庫以外のものを紹介する。(表1参照)

### (1) 藩校

「紀伊國古學館之印」(和歌山藩校)、「松坂學問所」(和歌山藩校)の印は、南葵文庫の章で見た「紀伊國學所印」と同様に紀州徳川家の藩校に由来する。江戸赤坂の藩邸には明教館、古学館、観光館が、和歌山には学習館、国学所があり、明治初年、江戸藩邸の蔵書を藩地伊勢松坂に移し、国学所を開設する計画があったが成功せず、

注30 この章の記述は、以下の資料による。

渡辺守邦、後藤憲二編(2001)『新編蔵書印譜』青裳堂書店

『講談社日本人名大辞典』(2001)講談社

国史大辞典編集委員会編(1979-1997)『国史大辞典』吉川弘文館

書肆に流れた蔵書もあったという<sup>(注31)</sup>。

また、「教授館図書」(高知藩校)の蔵書印を持つものも2冊見られる。

## (2) 個人

### ・「陽春廬記」 小中村清矩

幕末・明治時代前期の学者で、山田常典とともに丹鶴叢書編纂に携わった。国学、特に制度の学に通じた。号は陽春廬。文政4(1821)年、江戸に生まれる。母の妹に養われ、小中村家を継ぐ。清矩は学を堀越開山・置賜斎・西島蘭溪<sup>らんけい</sup>・中村六右衛門・亀田鶯谷<sup>おうこく</sup>・伊能顥則<sup>ひでのり</sup>らに受け、安政4(1857)年和歌山藩の古学館教授となり、明治2(1869)年太政官に出仕して、大学中助教・神祇権大史・神祇大史・神祇大録・教部大録を歴任し、明治19(1886)年帝国大学教授および『古事類苑』編纂委員長となりになった。明治23(1890)年貴族院議員に勅選、明治28(1895)年75歳で死去。蔵書は東京大学南葵文庫中に含まれる。

### ・「小精廬秘笈」「春城清玩」 市島春城(謙吉)

明治から昭和時代前期にかけての政治家、文化事業家。万延元(1860)年越後国蒲原郡の市島家五代治郎吉の長男として生まれた。東京英語学校を経て東京大学文学部に進んだ。明治15(1882)年立憲改進黨に入党した。明治24(1891)年『読売新聞』主筆、衆議院議員当選。その後は早稲田大学の経営に専念、文化事業家に転進した。明治35(1902)年初代早大図書館長となり、日本図書館協会初代会長として図書館近代化の礎ともなった。この間、明治39(1906)年国書刊行会を創設して、未刊の古典的文献数百種の校訂・刊行にあたった。昭和19(1944)年85歳で没。

### ・「中川氏蔵」 中川得楼

幕末一明治時代の好事家。天保4(1833)年に生まれ、旧幕時代は御代官所手代を勤めた。愛書家として聞こえ、自筆『蔵書目録』12冊が国会図書館に所蔵される。大正4(1915)年83歳で死去。

### ・「水荃家典籍印」 水荃磐樟

明治時代の神職、国学者、歌人。安政2(1855)年に生まれ、平野神社、平安神宮、八坂神社の禰宜をつとめた。一々庵百一の号で「我楽多珍聞」に寄稿し、和歌、戯文で知られたほか、故実家として「平安通志」の編集や時代行列の調査にあたった。明治40(1907)年53歳で死去。

注31 広瀬順皓(2005)「大名家・藩校の典籍と記録(5) 南葵文庫と和歌山藩藩政史料」『日本古書通信』70(6), p.24-25

・「萬都璣印」 久志本常彰

江戸時代中期の神職、歌人。伊勢神宮外宮の権禰宜<sup>ごんのぬぎ</sup>。延宝3(1675)年—宝暦2(1752)年。久志本常彰では、丹鶴叢書と時代が合わないが、一緒に捺されている「神宮□□□本□□□」とともに、伊勢神宮の辺りに印が伝わったものか。

・「平出氏書室記」 平出鏗二郎

明治時代の国文学者。明治2(1869)年生まれ。文部省にはいり図書課につとめ、明治期の風俗史の研究でも知られる。明治44(1911)年に43歳で死去。

・「能門安田元蔵図書記」 安田竹荘

江戸後期—明治時代の医師。文化4(1807)年生まれ。能登(石川県)の人。京都で小森桃得塙、小石元瑞らに西洋医学を学び、帰郷して開業。安政のころ種痘の牛痘苗を能登に伝え、その普及につとめた。のち金沢藩校明倫堂の教官となる。明治4(1871)年死去。65歳。

・「梅堂蔵書」 浅野梅堂(長祚)

江戸時代後期の武士、蔵書画家として有名。文化13(1816)年生まれ。嘉永5(1852)年京都町奉行となり、京都と周辺の諸陵を調査して『歴代廟陵考』をあらわす。書を杉浦西涯に、画を椿椿山らにまなぶ。詩文をこのみ、書画の鑑識に通じた。明治13(1880)年65歳で死去。

・「静慮江沢氏蔵」 江沢静慮

幕末・明治の歌人。上総国生。江沢講修の養子。本姓松崎、号は静慮。和歌を能くし、また、距離を量る術を述べた算書を著した。著書に『おほめぐみのつゆ』がある。明治27(1894)年79歳で死去。

・「坂田文庫」 坂田諸遠

江戸後期—明治時代の国学者、官吏。文化7(1810)年生まれ。筑前秋月藩士坂田諸保の養子となり、久留米藩士松岡明義に国学をまなぶ。維新後は外務省記録局に出仕、考証資料数百巻の著述あり。また、蔵書家として知られ、旧蔵の一部は現東大図書館南葵文庫にある。明治30(1897)年88歳で死去。

(こだま・ちひろ 平成9年度日本文学科卒・図書館契約職員)

表1 所蔵リスト

成蹊大学所蔵の丹鶴叢書の書名、刊記、蔵書印のリストになっている。初めの列は通し番号、2列目は図書館での分類番号、3列目は巻名。4列目の刊記は、最終巻にもかかわらず刊記のないものを「無刊記」としている。分冊の途中の巻で刊記のないものは「なし」となっている。通し番号408以降は、丹鶴叢書と同時に寄贈された、丹鶴外書『大系図書引便覧』も加えた。本文中の記述は、断りのない限り丹鶴外書は含めていない。

・印記「成蹊学園緑蔭堂文庫」、「成蹊学園圖書」は省略する

通番号	分類番号	巻名	書名	刊記	書肆名	印記	備考
1	1	丁未	正中御節記・内宮御神寶記	無刊記		「南葵文庫」, 「紀伊國學所印」, 「舊和歌山徳川氏蔵」	
2	1a	丁未	正中御節記・内宮御神寶記	無刊記		「小精廬秘笈」, 「末都會乃之記」	
3	1b	丁未	正中御節記・内宮御神寶記	無刊記		なし	
4	2	丁未	後水尾院當時年中行事 上	なし		「南葵文庫」, 「紀伊國學所印」, 「舊和歌山徳川氏蔵」	
5	3	丁未	後水尾院當時年中行事 下	無刊記		「南葵文庫」, 「紀伊國學所印」, 「舊和歌山徳川氏蔵」	
6	2a	丁未	後水尾院當時年中行事 上	なし		「春城清玩」, 「丸山文庫」	
7	3a	丁未	後水尾院當時年中行事 下	刊記あり、 目録あり	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 秋田屋太右衛門、 出雲寺文次郎	「春城清玩」, 「丸山文庫」	
8	2b	丁未	後水尾院當時年中行事 上			巻末「和漢洋書籍類並古本売買所高知市木町一丁目北東角開成舎第一支店」	
9	3b	丁未	後水尾院當時年中行事 下	刊記あり、 目録あり	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 秋田屋太右衛門、 出雲寺文次郎	巻末「和漢洋書籍類並古本売買所高知市木町一丁目北東角開成舎第一支店」	
10	12	丁未	春記一	なし		「南葵文庫」, 表紙「新宮城書蔵」, 表紙「丹鶴書院」	
11	13	丁未	春記二三・同裏文書	無刊記		「南葵文庫」, 表紙「新宮城書蔵」, 表紙「丹鶴書院」	
12	12a	丁未	春記一	なし		「吉田書齋」	
13	13a	丁未	春記二三・同裏文書	刊記あり、 目録あり	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 秋田屋太右衛門、 出雲寺文次郎	「吉田書齋」	
14	12b	丁未	春記一	なし		表紙 N1207 12 と書き込み	
15	13b	丁未	春記二三・同裏文書	無刊記		表紙 N1207 13 と書き込み	
16	12c	丁未	春記一	なし		なし	
17	13c	丁未	春記二三・同裏文書	無刊記		なし	
18	4	丁未	九條右大臣集・御堂閔白集・藤原家経朝臣集	無刊記		「南葵文庫」, 表紙「新宮城書蔵」	表紙青
19	4a	丁未	九條右大臣集・御堂閔白集・藤原家経朝臣集	無刊記		「中川氏蔵」	表紙青
20	4b	丁未	九條右大臣集・御堂閔白集・藤原家経朝臣集	無刊記		なし	
21	4c	丁未	九條右大臣集・御堂閔白集・藤原家経朝臣集	無刊記		「水野氏」	
22	5	丁未	和泉式部續集 上	なし		「南葵文庫」, 表紙「丹鶴書院」	
23	6	丁未	和泉式部續集 下	無刊記		「南葵文庫」, 表紙「丹鶴書院」	
24	5a	丁未	和泉式部續集 上	なし		「吉田書齋」	

25	6a	丁未	和泉式部續集 下	刊記あり、 目録あり	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 秋田屋太右衛 門、 出雲寺文次郎	「吉田書斎」	
26	5b	丁未	和泉式部續集 上	なし		なし	
27	6b	丁未	和泉式部續集 下	無刊記		なし	
28	5c	丁未	和泉式部續集 上	なし		「水野氏」	
29	6c	丁未	和泉式部續集 下	無刊記		「水野氏」	
30	7	丁未	源重之女集・小侍従集・股富 門院大輔集	無刊記		「南葵文庫」, 表紙「新宮城書藏」	表紙青
31	7a	丁未	源重之女集・小侍従集・股富 門院大輔集	無刊記		「梶園藏書」	
32	7b	丁未	源重之女集・小侍従集・股富 門院大輔集	無刊記		「吉田書斎」	
33	7c	丁未	源重之女集・小侍従集・股富 門院大輔集	無刊記		「水野氏」	
34	7d	丁未	源重之女集・小侍従集・股富 門院大輔集	無刊記		なし	
35	8	丁未	風につれなき物語 上	なし		「南葵文庫」, 表紙「丹鶴書院」	
36	9	丁未	風につれなき物語 下	無刊記		「南葵文庫」, 表紙「丹鶴書院」	
37	8a	丁未	風につれなき物語 上	なし		「春城清玩」	
38	9a	丁未	風につれなき物語 下	無刊記		「春城清玩」	
39	8b	丁未	風につれなき物語 上	なし		表紙 N1207 31 と書き込み	
40	9b	丁未	風につれなき物語 下	刊記あり、 目録あり	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 秋田屋太右衛 門、 出雲寺文次郎	表紙 N1207 32 と書き込み	
41	8c	丁未	風につれなき物語 上	なし		なし	
42	9c	丁未	風につれなき物語 下	無刊記		なし	
43	11	戊申	雑筆要集	無刊記		「南葵文庫」, 表紙「丹鶴書院」	
44	11a	戊申	雑筆要集	無刊記		「陽春廬記」	書き入れあり「此書を儒林拾 要といふ□ 黒川春村氏 の地□名義 考にみゆ」
45	11b	戊申	雑筆要集	無刊記		表紙 N1207 14 と書き込み	
46	10	戊申	釋奠供物圖・諸陵雑事注文	無刊記		「南葵文庫」, 表紙「丹鶴書院」	
47	10a	戊申	釋奠供物圖・諸陵雑事注文	無刊記		なし	値札あり (二円五十銭)
48	25	戊申	室町殿春日詣記	無刊記		「南葵文庫」, 「飯田刻」, 「㊦篤尚 堂」, 「若闌」?	
49	25a	戊申	室町殿春日詣記	無刊記		表紙 N1207 15 と書き込み	
50	26	戊申	拵弓藤割次第・諸鞍日記	無刊記		「南葵文庫」	
51	29	戊申	萬代和歌集 一 二	なし		「南葵文庫」	「明治 33 年 9月18日水 野忠幹男爵 寄贈 丹鶴 叢書刊本百 三十八冊」 南葵文庫の 蔵書票
52	30	戊申	萬代和歌集 三 四	なし		「南葵文庫」, 表紙「新宮城書藏」, 表紙「丹鶴書院」	
53	31	戊申	萬代和歌集 五 六	なし		「南葵文庫」	
54	32	戊申	萬代和歌集 七 八	なし		「南葵文庫」	
55	33	戊申	萬代和歌集 九 十	なし		「南葵文庫」	題簽手書き
56	34	戊申	萬代和歌集 十一 十二	なし		「南葵文庫」, 表紙「新宮城書藏」, 表紙「丹鶴書院」	

57	35	戊申	萬代和歌集 十三 十四	なし		「南葵文庫」	
58	36	戊申	萬代和歌集 十五 十六	なし		「南葵文庫」	
59	37	戊申	萬代和歌集 十七 十八	なし		「南葵文庫」, 表紙「新宮城書藏」, 表紙「丹鶴書院」	
60	38	戊申	萬代和歌集 十九 二十	無刊記		「南葵文庫」	
61	29a	戊申	萬代和歌集 一 二	なし		「吉田書齋」, 「□楽□藏書記」	
62	30a	戊申	萬代和歌集 三 四	なし		「吉田書齋」	
63	31a	戊申	萬代和歌集 五 六	なし		「吉田書齋」	
64	32a	戊申	萬代和歌集 七 八	なし		「吉田書齋」	
65	33a	戊申	萬代和歌集 九 十	なし		「吉田書齋」	
66	34a	戊申	萬代和歌集 十一 十二	なし		「吉田書齋」	
67	35a	戊申	萬代和歌集 十三 十四	なし		「吉田書齋」	
68	36a	戊申	萬代和歌集 十五 十六	なし		「吉田書齋」	
69	37a	戊申	萬代和歌集 十七 十八	なし		「吉田書齋」	
70	38a	戊申	萬代和歌集 十九 二十	無刊記		「吉田書齋」	
71	29b	戊申	萬代和歌集 一 二	なし		なし	
72	30b	戊申	萬代和歌集 三 四	なし		なし	
73	31b	戊申	萬代和歌集 五 六	なし		なし	
74	32b	戊申	萬代和歌集 七 八	なし		なし	
75	33b	戊申	萬代和歌集 九 十	なし		なし	
76	34b	戊申	萬代和歌集 十一 十二	なし		なし	
77	35b	戊申	萬代和歌集 十三 十四	なし		なし	
78	36b	戊申	萬代和歌集 十五 十六	なし		なし	
79	37b	戊申	萬代和歌集 十七 十八	なし		なし	
80	38b	戊申	萬代和歌集 十九 二十	無刊記		なし	
81	29c	戊申	萬代和歌集 一 二	なし		「水野氏」	
82	30c	戊申	萬代和歌集 三 四	なし		「水野氏」	
83	31c	戊申	萬代和歌集 五 六	なし		「水野氏」	
84	32c	戊申	萬代和歌集 七 八	なし		「水野氏」	
85	35c	戊申	萬代和歌集 十三 十四	なし		「水野氏」	
86	36c	戊申	萬代和歌集 十五 十六	なし		「水野氏」	
87	37c	戊申	萬代和歌集 十七 十八	なし		「水野氏」	
88	38c	戊申	萬代和歌集 十九 二十	無刊記		「水野氏」	
89	27	戊申	九條家車圖	無刊記		「南葵文庫」	
90	28	戊申	西園寺家車圖	無刊記		「南葵文庫」, 表紙「丹鶴書院」	
91	39	戊申	前參議教長卿集 上	なし		「南葵文庫」	
92	40	戊申	前參議教長卿集 中	なし		「南葵文庫」	
93	41	戊申	前參議教長卿集 下	無刊記		「南葵文庫」	
94	39a	戊申	前參議教長卿集 上	なし		「吉田書齋」	
95	40a	戊申	前參議教長卿集 中	なし		「吉田書齋」	
96	41a	戊申	前參議教長卿集 下	無刊記		「吉田書齋」, 表紙「新宮城書藏」	
97	39b	戊申	前參議教長卿集 上	なし		「水野氏」	
98	40b	戊申	前參議教長卿集 中	なし		「水野氏」	
99	41b	戊申	前參議教長卿集 下	無刊記		「水野氏」	
100	42	戊申	濱松中納言物語 一上	なし		「南葵文庫」	
101	43	戊申	濱松中納言物語 一下	なし		「南葵文庫」	
102	44	戊申	濱松中納言物語 二上	なし		「南葵文庫」	
103	45	戊申	濱松中納言物語 二下	なし		「南葵文庫」	
104	47	戊申	濱松中納言物語 三下	なし		「南葵文庫」	
105	48	戊申	濱松中納言物語 四上	なし		「南葵文庫」	
106	49	戊申	濱松中納言物語 四下	無刊記		「南葵文庫」	
107	42a	戊申	濱松中納言物語 一上	なし		表紙 N1207 33 と書き込み	
108	43a	戊申	濱松中納言物語 一下	なし		表紙 N1207 34 と書き込み	
109	44a	戊申	濱松中納言物語 二上	なし		表紙 N1207 35 と書き込み	
110	45a	戊申	濱松中納言物語 二下	なし		表紙 N1207 36 と書き込み	
111	46a	戊申	濱松中納言物語 三上	なし		表紙 N1207 37 と書き込み	
112	47a	戊申	濱松中納言物語 三下	なし		表紙 N1207 38 と書き込み	
113	48a	戊申	濱松中納言物語 四上	なし		表紙 N1207 39 と書き込み	

114	49a	戊申	濱松中納言物語 四下	刊記あり、 目録なし	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 河内屋喜兵衛、 出雲寺文次郎	表紙 N1207 40 と書き込み	
115	50	戊申	乙寺縁起	無刊記		なし	
116	14	戊申	春記 壹	なし		「南葵文庫」	
117	15	戊申	春記 貳	なし		「南葵文庫」、表紙「新宮城書藏」、 表紙「丹鶴書院」	表紙書き入れあり
118	16	戊申	春記 参	なし		「南葵文庫」、表紙「新宮城書藏」、 表紙「丹鶴書院」	表紙書き入れあり
119	17	戊申	春記 肆	なし		「南葵文庫」、表紙「新宮城書藏」、 表紙「丹鶴書院」	表紙書き入れあり
120	18	戊申	春記 伍	なし		「南葵文庫」、表紙「新宮城書藏」、 表紙「丹鶴書院」	表紙書き入れあり
121	19	戊申	春記 陸	なし		「南葵文庫」、表紙「新宮城書藏」、 表紙「丹鶴書院」	表紙書き入れあり
122	20	戊申	春記 柒	なし		「南葵文庫」、表紙「新宮城書藏」、 表紙「丹鶴書院」	表紙書き入れあり
123	21	戊申	春記 捌	なし		「南葵文庫」、表紙「新宮城書藏」、 表紙「丹鶴書院」	表紙書き入れあり
124	22	戊申	春記 玖	なし		「南葵文庫」、表紙「新宮城書藏」、 表紙「丹鶴書院」	表紙書き入れあり
125	23	戊申	春記 拾	なし		「南葵文庫」、表紙「新宮城書藏」、 表紙「丹鶴書院」	表紙書き入れあり
126	24	戊申	春記 拾壹	無刊記		「南葵文庫」	
127	14a	戊申	春記 壹	なし		「吉田書齋」	
128	15a	戊申	春記 貳	なし		「吉田書齋」	
129	16a	戊申	春記 参	なし		「吉田書齋」	
130	17a	戊申	春記 肆	なし		「吉田書齋」	
131	18a	戊申	春記 伍	なし		「吉田書齋」	
132	19a	戊申	春記 陸	なし		「吉田書齋」	
133	20a	戊申	春記 柒	なし		「吉田書齋」	
134	21a	戊申	春記 捌	なし		「吉田書齋」	
135	22a	戊申	春記 玖	なし		「吉田書齋」	
136	23a	戊申	春記 拾	なし		「吉田書齋」	
137	24a	戊申	春記 拾壹	刊記あり、 目録あり	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 秋田屋太右衛門、 出雲寺文次郎	「吉田書齋」	
138	14b	戊申	春記 壹	なし		表紙 N1207 1 と書き込み	
139	15b	戊申	春記 貳	なし		表紙 N1207 2 と書き込み	
140	16b	戊申	春記 参	なし		表紙 N1207 3 と書き込み	
141	17b	戊申	春記 肆	なし		表紙 N1207 4 と書き込み	
142	18b	戊申	春記 伍	なし		表紙 N1207 5 と書き込み	
143	19b	戊申	春記 陸	なし		表紙 N1207 6 と書き込み	
144	20b	戊申	春記 柒	なし		表紙 N1207 7 と書き込み	
145	21b	戊申	春記 捌	なし		表紙 N1207 8 と書き込み	
146	22b	戊申	春記 玖	なし		表紙 N1207 9 と書き込み	
147	23b	戊申	春記 拾	なし		表紙 N1207 10 と書き込み	
148	24b	戊申	春記 拾壹	無刊記		表紙 N1207 11 と書き込み	
149	51	己酉	侍中群要 一 二 三	なし		「南葵文庫」, 「飯田刻」, 「㊥篤尚堂」	題簽手書き
150	52	己酉	侍中群要 四 五	なし		「南葵文庫」, 「飯田刻」, 「㊥篤尚堂」	題簽手書き
151	53	己酉	侍中群要 六 七	なし		「南葵文庫」, 「飯田刻」, 「㊥篤尚堂」	題簽手書き
152	54	己酉	侍中群要 八 九 十	無刊記		「南葵文庫」, 「飯田刻」, 「㊥篤尚堂」	題簽手書き
153	51a	己酉	侍中群要 一 二 三	なし		「江澤氏藏」, 「□文庫」	題簽無記入
154	52a	己酉	侍中群要 四 五	なし		「江澤氏藏」, 「□文庫」	
155	53a	己酉	侍中群要 六 七	なし		「□文庫」	

156	54a	己酉	侍中群要 八 九 十	刊記あり、 目録あり	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 秋田屋太右衛 門、 出雲寺文次郎	「江澤氏藏」, 「□文庫」	題簽無記入
157	55	己酉	信實朝臣集	無刊記		「南葵文庫」	
158	55a	己酉	信實朝臣集	無刊記		「吉田書齋」	
159	55b	己酉	信實朝臣集	無刊記		なし	
160	56	己酉	草根集 一	なし		「南葵文庫」	
161	57	己酉	草根集 二	なし		「南葵文庫」	
162	58	己酉	草根集 三	なし		「南葵文庫」	
163	59	己酉	草根集 四	なし		「南葵文庫」	
164	60	己酉	草根集 五	なし		「南葵文庫」	
165	61	己酉	草根集 六	なし		「南葵文庫」	
166	62	己酉	草根集 七	なし		「南葵文庫」, 表紙「新宮城書藏」, 表紙「丹鶴書院」	
167	63	己酉	草根集 八	なし		「南葵文庫」, 表紙「新宮城書藏」, 表紙「丹鶴書院」	
168	64	己酉	草根集 九	なし		「南葵文庫」	
169	65	己酉	草根集 十	なし		「南葵文庫」, 表紙「新宮城書藏」, 表紙「丹鶴書院」	
170	66	己酉	草根集 十一	なし		「南葵文庫」	
171	67	己酉	草根集 十二	なし		「南葵文庫」, 表紙「新宮城書藏」, 表紙「丹鶴書院」	
172	68	己酉	草根集 十三	なし		「南葵文庫」, 表紙「新宮城書藏」, 表紙「丹鶴書院」	
173	69	己酉	草根集 十四	なし		「南葵文庫」, 表紙「新宮城書藏」, 表紙「丹鶴書院」	
174	70	己酉	草根集 十五	無刊記		「南葵文庫」, 表紙「新宮城書藏」, 表紙「丹鶴書院」	
175	56a	己酉	草根集 一	なし		なし	
176	57a	己酉	草根集 二	なし		「水野氏」	
177	58a	己酉	草根集 三	なし		「水野氏」	
178	59a	己酉	草根集 四	なし		「水野氏」	
179	60a	己酉	草根集 五	なし		「水野氏」	
180	61a	己酉	草根集 六	なし		「水野氏」	
181	62a	己酉	草根集 七	なし		「水野氏」	
182	63a	己酉	草根集 八	なし		「水野氏」	
183	64a	己酉	草根集 九	なし		「水野氏」	
184	65a	己酉	草根集 十	なし		「水野氏」	
185	66a	己酉	草根集 十一	なし		「水野氏」	
186	67a	己酉	草根集 十二	なし		「水野氏」	
187	68a	己酉	草根集 十三	なし		「水野氏」	
188	69a	己酉	草根集 十四	なし		「水野氏」	
189	70a	己酉	草根集 十五	無刊記		「水野氏」	
190	71	己酉	繪師草紙	刊記あり、 目録あり	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 秋田屋太右衛 門、 出雲寺文次郎	「水荃家典籍印」, 「□□家□」, 卷 末「□□」	
191	71a	己酉	繪師草紙	無刊記		なし	
192	72	己酉	蒙古襲来繪詞 上	なし		「紀伊國古學館之印」, 「埽石汲 泉」, 「松坂學問所」, 「萬都環印」, 「神宮□□□本□□□□」	
193	73	己酉	蒙古襲来繪詞 中	なし		「紀伊國古學館之印」, 「埽石汲 泉」, 「松坂學問所」, 「萬都環印」, 「神宮□□□本□□□□」	

194	74	己酉	蒙古襲来繪詞 下	刊記あり、 目録あり	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 秋田屋太右衛 門、 出雲寺文次郎	「紀伊國古學館之印」、「埴石汲 泉」、「松坂學問所」、「萬都環印」、 「神宮□□□本□□□」	
195	72a	己酉	蒙古襲来繪詞 上	なし		卷末大正二年の印（古書店？）	
196	73a	己酉	蒙古襲来繪詞 中	なし		表紙N1207 19と書き込み	
197	74a	己酉	蒙古襲来繪詞 下	刊記あり、 目録あり	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 秋田屋太右衛 門、 出雲寺文次郎	表紙N1207 20と書き込み	
198	72b	己酉	蒙古襲来繪詞 上	なし		表紙N1207 18と書き込み	
199	73b	己酉	蒙古襲来繪詞 中	なし		なし	
200	74b	己酉	蒙古襲来繪詞 下	無刊記		なし	
201	75	庚戌	三中口傳 一	なし		「南葵文庫」	
202	76	庚戌	三中口傳 二 三	なし		「南葵文庫」	
203	77	庚戌	三中口傳 四 五	無刊記		「南葵文庫」	
204	75a	庚戌	三中口傳 一	なし		なし	
205	76a	庚戌	三中口傳 二 三	なし		なし	
206	77a	庚戌	三中口傳 四 五	無刊記		なし	
207	90	庚戌	今昔物語 二十二	なし		なし	
208	91	庚戌	今昔物語 二十三	なし		なし	
209	92	庚戌	今昔物語 二十四上	なし		「南葵文庫」	
210	93	庚戌	今昔物語 二十四中	なし		「南葵文庫」	
211	94	庚戌	今昔物語 二十四下	なし		「南葵文庫」、表紙「丹鶴書院」	
212	95	庚戌	今昔物語 二十五上	なし		「南葵文庫」、「陽春賦記」、「廣辻 氏藏書記」	
213	96	庚戌	今昔物語 二十五下	なし		「南葵文庫」	
214	97	庚戌	今昔物語 二十六上	なし		「南葵文庫」	
215	98	庚戌	今昔物語 二十六中	なし		「南葵文庫」	
216	99	庚戌	今昔物語 二十六下	なし		「南葵文庫」	
217	90a	庚戌	今昔物語 二十二	なし		なし	
218	91a	庚戌	今昔物語 二十三	なし		なし	
219	92a	庚戌	今昔物語 二十四上	なし		なし	
220	93a	庚戌	今昔物語 二十四中	なし		なし	
221	94a	庚戌	今昔物語 二十四下	なし		なし	
222	95a	庚戌	今昔物語 二十五上	なし		なし	
223	96a	庚戌	今昔物語 二十五下	なし		なし	
224	97a	庚戌	今昔物語 二十六上	なし		なし	
225	98a	庚戌	今昔物語 二十六中	なし		なし	
226	99a	庚戌	今昔物語 二十六下	なし		なし	
227	90b	庚戌	今昔物語 二十二	なし		「吉田書齋」	
228	91b	庚戌	今昔物語 二十三	なし		「吉田書齋」	
229	92b	庚戌	今昔物語 二十四上	なし		「吉田書齋」	
230	93b	庚戌	今昔物語 二十四中	なし		「吉田書齋」	
231	94b	庚戌	今昔物語 二十四下	なし		「吉田書齋」	
232	95b	庚戌	今昔物語 二十五上	なし		「吉田書齋」	
233	96b	庚戌	今昔物語 二十五下	なし		「吉田書齋」	
234	97b	庚戌	今昔物語 二十六上	なし		「吉田書齋」	
235	98b	庚戌	今昔物語 二十六中	なし		「吉田書齋」	
236	99b	庚戌	今昔物語 二十六下	なし		「吉田書齋」	
237	92c	庚戌	今昔物語 二十四上	なし		なし	
238	93c	庚戌	今昔物語 二十四中	なし		なし	
239	94c	庚戌	今昔物語 二十四下	なし		なし	
240	95c	庚戌	今昔物語 二十五上	なし		なし	
241	96c	庚戌	今昔物語 二十五下	なし		なし	
242	97c	庚戌	今昔物語 二十六上	なし		なし	
243	98c	庚戌	今昔物語 二十六中	なし		なし	

244	99c	庚戌	今昔物語 二十六下	なし		なし	
245	90d	庚戌	今昔物語 二十二	なし		「駒」	
246	91d	庚戌	今昔物語 二十三	なし		「駒」	
247	92d	庚戌	今昔物語 二十四上	なし		「駒」	
248	93d	庚戌	今昔物語 二十四中	なし		「駒」	
249	94d	庚戌	今昔物語 二十四下	なし		「駒」	
250	95d	庚戌	今昔物語 二十五上	なし		「駒」	
251	96d	庚戌	今昔物語 二十五下	なし		「駒」	
252	97d	庚戌	今昔物語 二十六上	なし		「駒」	
253	98d	庚戌	今昔物語 二十六中	なし		「駒」	
254	99d	庚戌	今昔物語 二十六下	なし		「駒」	
255	100	庚戌	今昔物語 二十七上	なし		「南葵文庫」	
256	101	庚戌	今昔物語 二十七中	なし		「南葵文庫」	
257	102	庚戌	今昔物語 二十七下	なし		「南葵文庫」	
258	103	庚戌	今昔物語 二十八上	なし		「南葵文庫」	
259	104	庚戌	今昔物語 二十八中	なし		「南葵文庫」	
260	105	庚戌	今昔物語 二十八下	なし		「南葵文庫」	
261	106	庚戌	今昔物語 二十九上	なし		「南葵文庫」, 表紙「丹鶴書院」	
262	107	庚戌	今昔物語 二十九中	なし		「南葵文庫」, 表紙「丹鶴書院」	
263	108	庚戌	今昔物語 二十九下	なし		「南葵文庫」, 表紙「丹鶴書院」	
264	110	庚戌	今昔物語 三十一上	なし		「南葵文庫」	
265	111	庚戌	今昔物語 三十一下	無刊記		「南葵文庫」	
266	100a	庚戌	今昔物語 二十七上	なし		なし	
267	101a	庚戌	今昔物語 二十七中	なし		なし	
268	102a	庚戌	今昔物語 二十七下	なし		なし	
269	103a	庚戌	今昔物語 二十八上	なし		なし	
270	104a	庚戌	今昔物語 二十八中	なし		なし	
271	105a	庚戌	今昔物語 二十八下	なし		なし	
272	106a	庚戌	今昔物語 二十九上	なし		なし	
273	107a	庚戌	今昔物語 二十九中	なし		なし	
274	108a	庚戌	今昔物語 二十九下	なし		なし	
275	109a	庚戌	今昔物語 三十	なし		なし	
276	110a	庚戌	今昔物語 三十一上	無刊記		なし	
277	111a	庚戌	今昔物語 三十一下	なし		なし	
278	100d	庚戌	今昔物語 二十七上	なし		「駒」	
279	101d	庚戌	今昔物語 二十七中	なし		「駒」	
280	102d	庚戌	今昔物語 二十七下	なし		「駒」	
281	103d	庚戌	今昔物語 二十八上	なし		「駒」	
282	104d	庚戌	今昔物語 二十八中	なし		「駒」	
283	105d	庚戌	今昔物語 二十八下	なし		「駒」	
284	106d	庚戌	今昔物語 二十九上	なし		「駒」	
285	107d	庚戌	今昔物語 二十九中	なし		「駒」	
286	108d	庚戌	今昔物語 二十九下	なし		「駒」	
287	109d	庚戌	今昔物語 三十	なし		「駒」	
288	110d	庚戌	今昔物語 三十一上	なし		「駒」	
289	111d	庚戌	今昔物語 三十一下	刊記あり、 目録なし	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 河内屋喜兵衛、 出雲寺文次郎	「駒」	
290	112	庚戌	忍音物語 上	なし		巻末「平出氏書室記」	
291	113	庚戌	忍音物語 下	刊記あり、 目録あり	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 秋田屋太右衛門、 出雲寺文次郎	巻末「平出氏書室記」	
292	112a	庚戌	忍音物語 上	なし		なし	

293	113a	庚戌	忍音物語 下	刊記あり、 目録あり	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 秋田屋太右衛 門、 出雲寺文次郎	なし	
294	114	辛亥	日本書紀 一	なし		「□□書屋」, 「能門安田元蔵図書記」	
295	115	辛亥	日本書紀 二	刊記あり、 目録あり	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 秋田屋太右衛 門、 出雲寺文次郎	「□□書屋」	
296	114a	辛亥	日本書紀 一	なし		「吉田書齋」, 「□□蔵書」	
297	115a	辛亥	日本書紀 二	刊記あり、 目録なし	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 河内屋喜兵衛、 出雲寺文次郎	「吉田書齋」, 「□□蔵書」	表紙がてまり柄
298	116	辛亥	東大寺要録 一	なし		「南葵文庫」, 「飯田刻」, 「㊦篤尚堂」	表紙が格子柄。題簽手書き。張り込み「再校了 落成入字済」東大寺要録壺」
299	117	辛亥	東大寺要録 二	なし		「南葵文庫」, 「飯田刻」, 「㊦篤尚堂」	
300	118	辛亥	東大寺要録 三	なし		「南葵文庫」, 「飯田刻」, 「㊦篤尚堂」	
301	119	辛亥	東大寺要録 四	なし		「南葵文庫」, 「飯田刻」, 「㊦篤尚堂」	
302	120	辛亥	東大寺要録 五	なし		「南葵文庫」, 「飯田刻」, 「㊦篤尚堂」	
303	121	辛亥	東大寺要録 六	なし		「南葵文庫」, 「飯田刻」, 「㊦篤尚堂」	
304	122	辛亥	東大寺要録 七	なし		「南葵文庫」, 「飯田刻」	
305	123	辛亥	東大寺要録 八	なし		「南葵文庫」, 「飯田刻」	
306	124	辛亥	東大寺要録 九	なし		「南葵文庫」, 「飯田刻」, 「㊦篤尚堂」	
307	125	辛亥	東大寺要録 十	無刊記		「南葵文庫」, 「飯田刻」, 「㊦篤尚堂」	
308	116a	辛亥	東大寺要録 一	なし		表紙 N1207 21 と書き込み	
309	117a	辛亥	東大寺要録 二	なし		表紙 N1207 22 と書き込み	
310	118a	辛亥	東大寺要録 三	なし		表紙 N1207 23 と書き込み	
311	119a	辛亥	東大寺要録 四	なし		表紙 N1207 24 と書き込み	
312	120a	辛亥	東大寺要録 五	なし		表紙 N1207 25 と書き込み	
313	121a	辛亥	東大寺要録 六	なし		表紙 N1207 26 と書き込み	
314	122a	辛亥	東大寺要録 七	なし		表紙 N1207 27 と書き込み	
315	123a	辛亥	東大寺要録 八	なし		表紙 N1207 28 と書き込み	
316	124a	辛亥	東大寺要録 九	なし		表紙 N1207 29 と書き込み	
317	125a	辛亥	東大寺要録 十	刊記あり、 目録あり	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 秋田屋太右衛 門、 出雲寺文次郎	表紙 N1207 30 と書き込み	
318	126	辛亥	風業和歌集 自一至五	なし		「南葵文庫」, 表紙「丹鶴書院」	
319	127	辛亥	風業和歌集 自六至十	なし		「南葵文庫」, 表紙「丹鶴書院」	
320	128	辛亥	風業和歌集 自十一至十五	なし		「南葵文庫」, 表紙「丹鶴書院」	
321	129	辛亥	風業和歌集 十六	刊記あり、 目録あり	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 秋田屋太右衛 門、 出雲寺文次郎	「南葵文庫」	
322	126a	辛亥	風業和歌集 自一至五	なし		「吉田書齋」	
323	127a	辛亥	風業和歌集 自六至十	なし		「吉田書齋」	
324	128a	辛亥	風業和歌集 自十一至十五	なし		「吉田書齋」	
325	129a	辛亥	風業和歌集 十六	無刊記		「吉田書齋」	
326	78	辛亥	今昔物語 十一上	なし		「南葵文庫」	
327	79	辛亥	今昔物語 十一下	なし		「南葵文庫」	
328	80	辛亥	今昔物語 十二上	なし		「南葵文庫」	

329	81	辛亥	今昔物語 十二下	なし		「南葵文庫」	
330	78a	辛亥	今昔物語 十一上	なし		「駒」	
331	79a	辛亥	今昔物語 十一下	なし		「駒」	
332	80a	辛亥	今昔物語 十二上	なし		「駒」	
333	81a	辛亥	今昔物語 十二下	刊記あり、 目録なし	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 河内屋喜兵衛、 出雲寺文次郎	「駒」	
334	82	壬子	今昔物語 十三上	なし		「南葵文庫」	表紙「丹鶴書院」
335	83	壬子	今昔物語 十三下	なし		「南葵文庫」	
336	84	壬子	今昔物語 十四上	なし		「南葵文庫」	
337	85	壬子	今昔物語 十四下	無刊記		「南葵文庫」	
338	82a	壬子	今昔物語 十三上	なし		「駒」	
339	83a	壬子	今昔物語 十三下	なし		「駒」	
340	84a	壬子	今昔物語 十四上	なし		「駒」	
341	85a	壬子	今昔物語 十四下	刊記あり、 目録なし	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 河内屋喜兵衛、 出雲寺文次郎	「駒」	
342	131	壬子	大納言経信卿集	無刊記			南葵ラベルはあるが印なし
343	131a	壬子	大納言経信卿集	無刊記			「吉田書齋」
344	130	壬子	紫式部日記画卷	刊記あり、 目録なし	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 河内屋喜兵衛、 出雲寺文次郎	「水荃家典籍印」	「□□家□」
345	132	壬子	武蔵國風土記	刊記あり、 目録なし	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 河内屋喜兵衛、 出雲寺文次郎	表紙 N1207 17 と書き込み	「乃中□□□□」
346	133	壬子	北山抄 一上	なし		「南葵文庫」	
347	134	壬子	北山抄 一下	なし		「南葵文庫」	
348	135	壬子	北山抄 二	なし		「南葵文庫」	
349	136	壬子	北山抄 三上	なし		「南葵文庫」	
350	137	壬子	北山抄 三下	なし		「南葵文庫」	
351	138	壬子	北山抄 四	なし		「南葵文庫」	
352	139	壬子	北山抄 五	なし		「南葵文庫」	
353	140	壬子	北山抄 六	なし		「南葵文庫」	
354	141	壬子	北山抄 七上	なし		「南葵文庫」	
355	142	壬子	北山抄 七下	なし		「南葵文庫」	
356	143	壬子	北山抄 八上	なし		「南葵文庫」	
357	144	壬子	北山抄 八下	なし		「南葵文庫」	
358	145	壬子	北山抄 九	無刊記		「南葵文庫」	
359	133a	壬子	北山抄 一上	なし		なし	
360	134a	壬子	北山抄 一下	なし		なし	
361	135a	壬子	北山抄 二	なし		なし	
362	136a	壬子	北山抄 三上	なし		なし	
363	137a	壬子	北山抄 三下	なし		なし	
364	138a	壬子	北山抄 四	なし		なし	
365	139a	壬子	北山抄 五	なし		なし	
366	140a	壬子	北山抄 六	なし		なし	
367	141a	壬子	北山抄 七上	なし		なし	
368	142a	壬子	北山抄 七下	なし		なし	
369	143a	壬子	北山抄 八上	なし		「教授館図書」	写本、表紙 は同じ
370	145a	壬子	北山抄 九	なし		「教授館図書」	写本、九の 13丁目から
371	149	癸丑	古事談 一	なし		「南葵文庫」	
372	150	癸丑	古事談 二	なし		「南葵文庫」	
373	151	癸丑	古事談 三	なし		「南葵文庫」	
374	152	癸丑	古事談 四	なし		「南葵文庫」	

375	153	癸丑	古事談 五	なし		「南葵文庫」	
376	154	癸丑	古事談 六	なし		「南葵文庫」	
377	149a	癸丑	古事談 一	なし		「梅堂蔵書」	
378	150a	癸丑	古事談 二	なし		「梅堂蔵書」	
379	151a	癸丑	古事談 三	なし		「梅堂蔵書」	
380	152a	癸丑	古事談 四	なし		「梅堂蔵書」	
381	153a	癸丑	古事談 五	なし		「梅堂蔵書」	
382	154a	癸丑	古事談 六	刊記あり、 目録なし	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 河内屋喜兵衛、 出雲寺文次郎	「梅堂蔵書」	
383	149b	癸丑	古事談 一	なし		なし	
384	150b	癸丑	古事談 二	なし		なし	
385	151b	癸丑	古事談 三	なし		なし	
386	152b	癸丑	古事談 四	なし		なし	
387	153b	癸丑	古事談 五	なし		なし	
388	154b	癸丑	古事談 六	刊記あり、 目録なし	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 河内屋喜兵衛、 出雲寺文次郎	なし	
389	149c	癸丑	古事談 一	なし		「静廬江沢氏蔵」	茶表紙、題 籤無記入
390	150c	癸丑	古事談 二	なし		「静廬江沢氏蔵」	
391	151c	癸丑	古事談 三	なし		「静廬江沢氏蔵」	
392	152c	癸丑	古事談 四	なし		「静廬江沢氏蔵」	
393	153c	癸丑	古事談 五	なし		「静廬江沢氏蔵」	
394	154c	癸丑	古事談 六	刊記あり、 目録なし	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 河内屋喜兵衛、 出雲寺文次郎	「静廬江沢氏蔵」	
395	86	癸丑	今昔物語 十五上	なし		「南葵文庫」	
396	87	癸丑	今昔物語 十五下	なし		「南葵文庫」	
397	88	癸丑	今昔物語 十六上	なし		「南葵文庫」	
398	89	癸丑	今昔物語 十六下	無刊記		「南葵文庫」	
399	86a	癸丑	今昔物語 十五上	なし		「駒」	
400	87a	癸丑	今昔物語 十五下	なし		「駒」	
401	88a	癸丑	今昔物語 十六上	なし		「駒」	
402	89a	癸丑	今昔物語 十六下	刊記あり、 目録なし	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 河内屋喜兵衛、 出雲寺文次郎	「駒」	
403	146	癸丑	基盛朝臣鷹狩記	無刊記		「南葵文庫」	
404	146a	癸丑	基盛朝臣鷹狩記	無刊記		「吉田書齋」	
405	146b	癸丑	基盛朝臣鷹狩記	刊記あり、 目録なし	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 河内屋喜兵衛、 出雲寺文次郎	「小精庵秘笈」, 「小川□印」	
406	146c	癸丑	基盛朝臣鷹狩記	刊記あり、 目録なし	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 河内屋喜兵衛、 出雲寺文次郎	表紙 N1207 16 と書き込み	
407	146d	癸丑	基盛朝臣鷹狩記	刊記あり、 目録なし	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 河内屋喜兵衛、 出雲寺文次郎	なし	無地表紙、 表紙にラベル
408	155	一	大系図畫引便覧 元	なし		「南葵文庫」, 「坂田文庫」, 卷末 「□文庫」, 「南葵文庫購入古本紀 元二千五百六十三年 明治三十六 年十二月二十一日」	表紙書き入 れあり

409	156	--	大系図書引便覧 享	なし		「南葵文庫」, 「坂田文庫」, 卷末「□文庫」, 「南葵文庫購入古本紀元二千五百六十三年 明治三十六年十二月二十一日」	表紙書き入れあり
410	157	--	大系図書引便覧 利	なし		「南葵文庫」, 「坂田文庫」, 卷末「□文庫」, 「南葵文庫購入古本紀元二千五百六十三年 明治三十六年十二月二十一日」	表紙書き入れあり
411	158	--	大系図書引便覧 貞	刊記あり、 目録なし	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 秋田屋太右衛門、 出雲寺文次郎	「南葵文庫」, 「坂田文庫」, 卷末「□文庫」, 「南葵文庫購入古本紀元二千五百六十三年 明治三十六年十二月二十一日」	表紙書き入れあり
412	155a	--	大系図書引便覧 元	なし		「春城清玩」, 表紙「□」	
413	156a	--	大系図書引便覧 享	なし		「春城清玩」, 表紙「□」	
414	157a	--	大系図書引便覧 利	なし		「春城清玩」, 表紙「□」	
415	158a	--	大系図書引便覧 貞	刊記あり、 目録なし	中屋徳兵衛、 岡田屋嘉七、 秋田屋太右衛門、 出雲寺文次郎	「春城清玩」, 表紙「□」	

表2 校正本

校正本の各丁の印のリストで、1行目は通し番号と帙名、書名を示している。左の列は丁数で、本の表記に従っている。ハイフンの前は巻数で、2-1は2巻1丁目となる。「飯田刻」には8種類の1文字印が、「㊦篤尚堂」には6種類の1文字印が捺されていた。

飯田刻	與	己	多	紋	卜	三	伊	○
㊦篤尚堂	金	水	灑	安	谷	榮		

81	戊申	室町殿春日詣記
1	飯田刻	なし
2	飯田刻	若闌?
3	飯田刻	なし
4	飯田刻	なし
5	飯田刻	なし
6	飯田刻	若闌?
7	飯田刻	若闌?
8	飯田刻	なし
9	飯田刻	なし
10	飯田刻	若闌?
11	㊦篤尚堂	若闌?
12	㊦篤尚堂	若闌?
13	㊦篤尚堂	なし
14	㊦篤尚堂	若闌?
15	㊦篤尚堂	若闌?
16	㊦篤尚堂	若闌?
17	㊦篤尚堂	なし
	飯田刻	
		10
	㊦篤尚堂	
		7

149	己酉	侍中群要一二三
1	飯田刻	なし
2	飯田刻	なし
3	飯田刻	なし
4	飯田刻	なし
5	飯田刻	なし
6	飯田刻	なし
7	飯田刻	なし
8	飯田刻	なし
9	飯田刻	なし
10	飯田刻	なし
11	㊦篤尚堂	金
12	㊦篤尚堂	金

13	㊦篤尚堂	水
14	㊦篤尚堂	水
15	㊦篤尚堂	灑
16	㊦篤尚堂	灑
17	㊦篤尚堂	安
18	㊦篤尚堂	安
2-1	㊦篤尚堂	谷
2-2	㊦篤尚堂	谷
2-3	㊦篤尚堂	榮
2-4	㊦篤尚堂	榮
2-5	㊦篤尚堂	谷
2-6	㊦篤尚堂	谷
2-7	㊦篤尚堂	谷
2-8	㊦篤尚堂	谷
2-9	㊦篤尚堂	谷
2-10	なし	なし
2-11	㊦篤尚堂	金
2-12	㊦篤尚堂	金
2-13	㊦篤尚堂	水
2-14	㊦篤尚堂	水
2-15	㊦篤尚堂	金
3-1	㊦篤尚堂	灑
3-2	㊦篤尚堂	灑
3-3	㊦篤尚堂	灑
3-4	㊦篤尚堂	灑
3-5	㊦篤尚堂	安
3-6	㊦篤尚堂	安
3-7	飯田刻	なし
3-8	飯田刻	なし
3-9	飯田刻	與
3-10	飯田刻	與
3-11	飯田刻	なし
3-12	飯田刻	なし
3-13	飯田刻	己
3-14	飯田刻	己
3-15	飯田刻	多

3-16	飯田刻	多
3-17	飯田刻	多
3-18	飯田刻	多
3-19	飯田刻	多
3-20	飯田刻	多
3-21	飯田刻	己
3-22	飯田刻	己
3-23	飯田刻	紋
3-24	飯田刻	紋
3-25	飯田刻	紋
	飯田刻	
		29
	㊦篤尚堂	
		29

150	己酉	侍中群要四五
4-1	飯田刻	己
4-2	飯田刻	己
4-3	飯田刻	多
4-4	飯田刻	多
4-5	飯田刻	紋
4-6	飯田刻	紋
4-7	飯田刻	與
4-8	飯田刻	與
4-9	飯田刻	與
4-10	飯田刻	與
4-11	㊦篤尚堂	榮
4-12	㊦篤尚堂	榮
4-13	㊦篤尚堂	谷
4-14	㊦篤尚堂	谷
4-15	㊦篤尚堂	金
4-16	㊦篤尚堂	金
4-17	㊦篤尚堂	水
4-18	㊦篤尚堂	水
4-19	㊦篤尚堂	金
5-1	飯田刻	多

5-2	飯田刻	多
5-3	飯田刻	多
5-4	飯田刻	多
5-5	飯田刻	多
5-6	飯田刻	多
5-7	飯田刻	○
5-8	飯田刻	○
5-9	飯田刻	與
5-10	飯田刻	與
5-11	飯田刻	與
5-12	飯田刻	與
5-13	飯田刻	與
5-14	飯田刻	與
5-15	飯田刻	己
5-16	飯田刻	己
5-17	飯田刻	己
5-18	飯田刻	己
5-19	飯田刻	多
5-20	飯田刻	多
5-21	飯田刻	紋

飯田刻
31
㊥篤尚堂
9

151	己酉	侍中群要六七
6-1	飯田刻	○
6-2	飯田刻	○
6-3	飯田刻	紋
6-4	飯田刻	紋
6-5	飯田刻	多
6-6	飯田刻	多
6-7	飯田刻	多
6-8	飯田刻	多
6-9	飯田刻	多
6-10	㊥篤尚堂	瀧
6-11	㊥篤尚堂	なし
6-12	㊥篤尚堂	なし
6-13	㊥篤尚堂	金
6-14	㊥篤尚堂	金
6-15	㊥篤尚堂	水
6-16	㊥篤尚堂	水
6-17	㊥篤尚堂	水

7-1	㊥篤尚堂	瀧
7-2	㊥篤尚堂	瀧
7-3	㊥篤尚堂	安
7-4	㊥篤尚堂	安
7-5	㊥篤尚堂	瀧
7-6	㊥篤尚堂	瀧
7-7	㊥篤尚堂	安
7-8	㊥篤尚堂	安
7-9	㊥篤尚堂	瀧
7-10	㊥篤尚堂	瀧
7-11	㊥篤尚堂	榮
7-12	㊥篤尚堂	榮
7-13	㊥篤尚堂	谷
7-14	㊥篤尚堂	谷
7-15	㊥篤尚堂	榮
7-16	㊥篤尚堂	榮
7-17	㊥篤尚堂	谷
7-18	㊥篤尚堂	谷
7-19	㊥篤尚堂	榮
7-20	㊥篤尚堂	榮
7-21	㊥篤尚堂	谷
7-22	㊥篤尚堂	谷

飯田刻
9
㊥篤尚堂
30

152	己酉	侍中群要八九十
8-1	飯田刻	多
8-2	飯田刻	多
8-3	飯田刻	多
8-4	飯田刻	多
8-5	飯田刻	與
8-6	飯田刻	與
8-7	飯田刻	與
8-8	飯田刻	與
8-9	飯田刻	己
8-10	飯田刻	己
8-11	㊥篤尚堂	谷
8-12	㊥篤尚堂	榮
8-13	㊥篤尚堂	谷
8-14	㊥篤尚堂	榮
8-15	㊥篤尚堂	谷

8-16	㊥篤尚堂	谷
8-17	㊥篤尚堂	谷
8-18	㊥篤尚堂	谷
8-19	㊥篤尚堂	安
8-20	㊥篤尚堂	安
8-21	㊥篤尚堂	安
9-1	飯田刻	多
9-2	飯田刻	多
9-3	飯田刻	多
9-4	飯田刻	多
9-5	飯田刻	多
9-6	飯田刻	多
9-7	飯田刻	紋
9-8	飯田刻	紋
9-9	飯田刻	己
9-10	飯田刻	己
9-11	なし	金
9-12	なし	金
9-13	なし	金
9-14	なし	金
9-15	なし	金
9-16	なし	金
9-17	なし	金
9-18	なし	金
10-1	㊥篤尚堂	瀧
10-2	㊥篤尚堂	瀧
10-3	㊥篤尚堂	瀧
10-4	㊥篤尚堂	瀧
10-5	㊥篤尚堂	瀧
10-6	㊥篤尚堂	瀧
10-7	㊥篤尚堂	谷
10-8	㊥篤尚堂	谷
10-9	㊥篤尚堂	谷
10-10	㊥篤尚堂	谷
10-11	飯田刻	多
10-12	飯田刻	多
10-13	飯田刻	多
10-14	飯田刻	多
10-15	飯田刻	與
10-16	飯田刻	與
10-17	飯田刻	與
10-18	飯田刻	與
10-19	飯田刻	己

10-20	飯田刻	己
	飯田刻	
		30
	㊥篤尚堂	
		29

298	辛亥	東大寺要録一
1	飯田刻	己
2	飯田刻	己
3	㊥篤尚堂	瀧
4	㊥篤尚堂	瀧
5	㊥篤尚堂	瀧
6	㊥篤尚堂	瀧
7	㊥篤尚堂	安
8	㊥篤尚堂	安
9	㊥篤尚堂	瀧
10	㊥篤尚堂	瀧
11	飯田刻	多
12	飯田刻	與
13	飯田刻	卜
14	飯田刻	卜
15	飯田刻	與
16	飯田刻	與
17	飯田刻	與
18	飯田刻	與
19	飯田刻	多
20	飯田刻	多
21	飯田刻	多
22	飯田刻	多
23	㊥篤尚堂	谷
24	㊥篤尚堂	谷
25	㊥篤尚堂	谷
26	㊥篤尚堂	谷
27	㊥篤尚堂	榮
28	㊥篤尚堂	谷
29	㊥篤尚堂	金
30	㊥篤尚堂	金
31	飯田刻	己

飯田刻
15
㊥篤尚堂
16

299	辛亥	東大寺要録二
1	飯田刻	己
2	飯田刻	己
3	飯田刻	紋
4	飯田刻	紋
5	飯田刻	多
6	飯田刻	多
7	飯田刻	紋
8	飯田刻	紋
9	なし	なし
10	なし	なし
11	飯田刻	紋
12	飯田刻	紋
13	飯田刻	與
14	飯田刻	與
15	なし	なし
16	飯田刻	多
17	なし	なし
18	㊥篤尚堂	金
19	㊥篤尚堂	金
20	㊥篤尚堂	水
21	㊥篤尚堂	水
22	㊥篤尚堂	金
23	㊥篤尚堂	金
24	㊥篤尚堂	金
25	㊥篤尚堂	安
26	㊥篤尚堂	安
27	㊥篤尚堂	安
28	㊥篤尚堂	安
29	㊥篤尚堂	瀧
30	㊥篤尚堂	瀧
31	㊥篤尚堂	谷
32	㊥篤尚堂	谷
33	㊥篤尚堂	榮
34	㊥篤尚堂	榮

飯田刻
17
㊥篤尚堂
17

300	辛亥	東大寺要録三
1	飯田刻	己
2	飯田刻	己

3	飯田刻	與
4	飯田刻	與
5	飯田刻	紋
6	飯田刻	□不明
7	飯田刻	□不明
8	飯田刻	多
9	㊥篤尚堂	谷
10	㊥篤尚堂	谷
11	㊥篤尚堂	安
12	㊥篤尚堂	安
13	㊥篤尚堂	瀧
14	㊥篤尚堂	瀧
15	飯田刻	與
16	飯田刻	與
17	飯田刻	與
18	飯田刻	與
19	飯田刻	卜
20	㊥篤尚堂	榮
21	㊥篤尚堂	榮
22	㊥篤尚堂	谷
23	㊥篤尚堂	谷
24	㊥篤尚堂	安
25	㊥篤尚堂	安
26	㊥篤尚堂	安

飯田刻
13
㊥篤尚堂
13

301	辛亥	東大寺要録四
1	なし	與
2	なし	なし
3	飯田刻	卜
4	飯田刻	卜
5	飯田刻	紋
6	飯田刻	紋
7	飯田刻	己
8	飯田刻	己
9	飯田刻	多
10	飯田刻	多
11	飯田刻	多
12	飯田刻	多
13	㊥篤尚堂	瀧

14	㊥篤尚堂	瀧
15	㊥篤尚堂	瀧
16	㊥篤尚堂	瀧
17	㊥篤尚堂	安
18	㊥篤尚堂	安
19	㊥篤尚堂	榮
20	㊥篤尚堂	榮
21	㊥篤尚堂	谷
22	㊥篤尚堂	谷
23	㊥篤尚堂	榮
24	㊥篤尚堂	榮
25	㊥篤尚堂	谷
26	㊥篤尚堂	谷
27	㊥篤尚堂	榮
28	㊥篤尚堂	榮
29	㊥篤尚堂	谷
30	㊥篤尚堂	谷
31	㊥篤尚堂	瀧
32	㊥篤尚堂	瀧
33	㊥篤尚堂	安
34	㊥篤尚堂	安
35	㊥篤尚堂	瀧
36	㊥篤尚堂	瀧
37	飯田刻	與
38	飯田刻	なし
39	なし	與, 多
40	飯田刻	多
41	飯田刻	紋
42	飯田刻	紋
43	飯田刻	與
44	なし	與
45	飯田刻	三
46	飯田刻	三
47	飯田刻	卜
	飯田刻	
	23	
	㊥篤尚堂	
	24	

302	辛亥	東大寺要録五
1	㊥篤尚堂	安
2	㊥篤尚堂	安
3	㊥篤尚堂	瀧

4	㊥篤尚堂	瀧
5	㊥篤尚堂	榮
6	㊥篤尚堂	榮
7	㊥篤尚堂	谷
8	㊥篤尚堂	谷
9	㊥篤尚堂	榮
10	㊥篤尚堂	榮
11	㊥篤尚堂	谷
12	㊥篤尚堂	谷
13	㊥篤尚堂	水
14	㊥篤尚堂	水
15	㊥篤尚堂	水
16	㊥篤尚堂	水
17	㊥篤尚堂	金
18	㊥篤尚堂	金
19	㊥篤尚堂	安
20	㊥篤尚堂	安
21	㊥篤尚堂	瀧
22	㊥篤尚堂	瀧
23	㊥篤尚堂	安
24	㊥篤尚堂	安
25	飯田刻	紋
26	飯田刻	紋
27	なし	なし
28	飯田刻	多
29	飯田刻	多
30	飯田刻	多
31	飯田刻	與
32	飯田刻	與
33	飯田刻	卜
34	飯田刻	卜
35	飯田刻	己
36	飯田刻	己
37	飯田刻	□不明
38	飯田刻	□不明
39	飯田刻	三
40	飯田刻	三
41	飯田刻	己
42	飯田刻	己
43	飯田刻	卜
44	飯田刻	卜
45	飯田刻	卜
46	飯田刻	卜

47	飯田刻	己
48	飯田刻	己
	飯田刻	
	24	
	㊥篤尚堂	
	24	

303	辛亥	東大寺要録六
1	飯田刻	己
2	飯田刻	多
3	飯田刻	與
4	飯田刻	與
5	㊥篤尚堂	瀧
6	㊥篤尚堂	瀧
7	㊥篤尚堂	安
8	㊥篤尚堂	安
9	㊥篤尚堂	瀧
10	㊥篤尚堂	瀧
11	㊥篤尚堂	瀧
12	㊥篤尚堂	瀧
13	㊥篤尚堂	金
14	㊥篤尚堂	金
15	㊥篤尚堂	水
16	㊥篤尚堂	水
17	㊥篤尚堂	谷
18	㊥篤尚堂	谷
19	㊥篤尚堂	榮
20	㊥篤尚堂	榮
21	㊥篤尚堂	谷
22	㊥篤尚堂	谷
23	㊥篤尚堂	榮
24	㊥篤尚堂	榮
25	飯田刻	□不明
26	飯田刻	□不明
27	飯田刻	□不明
28	飯田刻	□不明
29	飯田刻	多
30	飯田刻	多
31	飯田刻	己
32	飯田刻	己
33	飯田刻	多
34	なし	なし
35	飯田刻	與

36	飯田刻	與
37	飯田刻	己
38	飯田刻	己
39	飯田刻	己
	飯田刻	
	19	
	㊥篤尚堂	
	20	

304	辛亥	東大寺要録七
1	飯田刻	己
2	飯田刻	多
3	飯田刻	己
4	飯田刻	與
5	飯田刻	與
6	飯田刻	與
7	飯田刻	多
8	飯田刻	多
9	飯田刻	與
10	飯田刻	與
11	飯田刻	多
12	飯田刻	多
13	飯田刻	己
14	飯田刻	己
29	飯田刻	多
32	飯田刻	多
	飯田刻	
	16	
	㊥篤尚堂	
	0	

305	辛亥	東大寺要録八
1	飯田刻	己
2	飯田刻	己
3	飯田刻	與
4	飯田刻	與
5	飯田刻	與
6	飯田刻	與
7	飯田刻	多
8	飯田刻	多
9	飯田刻	與
10	飯田刻	與
11	飯田刻	多

12	飯田刻	多
31	飯田刻	多
32	飯田刻	多
33	飯田刻	己
34	飯田刻	己
35	飯田刻	三
36	飯田刻	三
	飯田刻	
	18	
	㊥篤尚堂	
	0	

306	辛亥	東大寺要録九
1	㊥篤尚堂	安
2	㊥篤尚堂	安
3	㊥篤尚堂	瀧
4	㊥篤尚堂	瀧
5	㊥篤尚堂	安
6	㊥篤尚堂	安
7	㊥篤尚堂	瀧
8	㊥篤尚堂	瀧
9	㊥篤尚堂	谷
10	㊥篤尚堂	谷
11	㊥篤尚堂	榮
12	㊥篤尚堂	榮
13	㊥篤尚堂	金
14	㊥篤尚堂	金
15	㊥篤尚堂	水
16	㊥篤尚堂	水
17	飯田刻	與
18	飯田刻	與
19	飯田刻	與
20	なし	與
21	飯田刻	與
22	飯田刻	與
23	飯田刻	己
24	飯田刻	己
25	飯田刻	與
26	飯田刻	己
27	飯田刻	多
28	飯田刻	多
29	飯田刻	多
30	飯田刻	多

31	飯田刻	紋
32	飯田刻	紋
33	飯田刻	與
	飯田刻	
	17	
	㊥篤尚堂	
	16	

307	辛亥	東大寺要録十
1	飯田刻	多
2	なし	なし
3	飯田刻	與
4	飯田刻	與
5	飯田刻	與
6	飯田刻	多
7	㊥篤尚堂	安
8	㊥篤尚堂	安
9	㊥篤尚堂	瀧
10	㊥篤尚堂	瀧
11	㊥篤尚堂	安
12	㊥篤尚堂	安
13	飯田刻	多
14	飯田刻	多
15	飯田刻	伊
16	飯田刻	伊
17	飯田刻	多
18	飯田刻	多
19	飯田刻	紋
20	㊥篤尚堂	金
21	㊥篤尚堂	金
22	㊥篤尚堂	水
23	㊥篤尚堂	水
24	㊥篤尚堂	谷
25	㊥篤尚堂	谷
26	㊥篤尚堂	谷

飯田刻	
13	
㊥篤尚堂	
13	

表3 彫師

校正本の1文字印を、それぞれの出現数でまとめたものである。熟練度合いによって、彫る速さ、担当量が異なったのであろう、かなりの数の差が見られる。

150 己酉 侍中群要四五

飯田刻	31
㊥篤尚堂	9

152 己酉 侍中群要八九十

飯田刻	30
㊥篤尚堂	29

総計

飯田刻	與	66
	己	48
	多	80
	紋	26
	卜	12
	三	6
	伊	2
○	4	
㊥篤尚堂	金	33
	水	21
	瀧	53
	安	42
	谷	55
	榮	33
なし	26	
合計	507	

飯田刻	與	10
	己	6
	多	10
	紋	3
	卜	0
	三	0
	伊	0
○	2	
㊥篤尚堂	金	3
	水	2
	瀧	0
	安	0
	谷	2
	榮	2
なし	0	
合計	40	

飯田刻	與	8
	己	6
	多	14
	紋	2
	卜	0
	三	0
	伊	0
○	0	
㊥篤尚堂	金	8
	水	0
	瀧	6
	安	3
	谷	10
	榮	2
なし	0	
合計	59	

149 己酉 侍中群要一二三

飯田刻	29
㊥篤尚堂	29

151 己酉 侍中群要六七

飯田刻	9
㊥篤尚堂	30

298 辛亥 東大寺要録一

飯田刻	15
㊥篤尚堂	16

飯田刻	與	2
	己	4
	多	6
	紋	3
	卜	0
	三	0
	伊	0
○	0	
㊥篤尚堂	金	5
	水	4
	瀧	6
	安	4
	谷	7
	榮	2
なし	15	
合計	58	

飯田刻	與	0
	己	0
	多	5
	紋	2
	卜	0
	三	0
	伊	0
○	2	
㊥篤尚堂	金	2
	水	3
	瀧	7
	安	4
	谷	6
	榮	6
なし	2	
合計	39	

飯田刻	與	5
	己	3
	多	5
	紋	0
	卜	2
	三	0
	伊	0
○	0	
㊥篤尚堂	金	2
	水	0
	瀧	6
	安	2
	谷	5
	榮	1
なし	0	
合計	31	

299 辛亥 東大寺要録二

飯田刻	17
㊥篤尚堂	17

飯田刻	與	2
	己	2
	多	3
	紋	6
	卜	0
	三	0
	伊	0
○	0	
㊥篤尚堂	金	5
	水	2
	瀧	2
	安	4
	谷	2
	榮	2
	なし	4
	合計	34

301 辛亥 東大寺要録四

飯田刻	23
㊥篤尚堂	24

飯田刻	與	5
	己	2
	多	6
	紋	4
	卜	3
	三	2
	伊	0
○	0	
㊥篤尚堂	金	0
	水	0
	瀧	8
	安	4
	谷	6
	榮	6
	なし	2
	合計	48

(1丁に與、多の2印)

303 辛亥 東大寺要録六

飯田刻	19
㊥篤尚堂	20

飯田刻	與	4
	己	6
	多	4
	紋	0
	卜	0
	三	0
	伊	0
○	0	
㊥篤尚堂	金	2
	水	2
	瀧	6
	安	2
	谷	4
	榮	4
	なし	1
	不明	4
	合計	39

300 辛亥 東大寺要録三

飯田刻	13
㊥篤尚堂	13

飯田刻	與	6
	己	2
	多	1
	紋	1
	卜	1
	三	0
	伊	0
○	0	
㊥篤尚堂	金	0
	水	0
	瀧	2
	安	5
	谷	4
	榮	2
	なし	0
	不明	2
	合計	26

302 辛亥 東大寺要録五

飯田刻	24
㊥篤尚堂	24

飯田刻	與	2
	己	6
	多	3
	紋	2
	卜	6
	三	2
	伊	0
○	0	
㊥篤尚堂	金	2
	水	4
	瀧	4
	安	6
	谷	4
	榮	4
	なし	1
	不明	2
	合計	48

304 辛亥 東大寺要録七

飯田刻	16
㊥篤尚堂	0

飯田刻	與	5
	己	4
	多	7
	紋	0
	卜	0
	三	0
	伊	0
○	0	
㊥篤尚堂	金	0
	水	0
	瀧	0
	安	0
	谷	0
	榮	0
	なし	0
	合計	16

305 辛亥 東大寺要録八

飯田刻	18
㊥篤尚堂	0

飯田刻	與	6
	己	4
	多	6
	紋	0
	卜	0
	三	2
	伊	0
	○	0
㊥篤尚堂	金	0
	水	0
	瀧	0
	安	0
	谷	0
	榮	0
	なし	0
	合計	18

307 辛亥 東大寺要録十

飯田刻	13
㊥篤尚堂	13

飯田刻	與	3
	己	0
	多	6
	紋	1
	卜	0
	三	0
	伊	2
	○	0
㊥篤尚堂	金	2
	水	2
	瀧	2
	安	4
	谷	3
	榮	0
	なし	1
	合計	26

306 辛亥 東大寺要録九

飯田刻	17
㊥篤尚堂	16

飯田刻	與	8
	己	3
	多	4
	紋	2
	卜	0
	三	0
	伊	0
	○	0
㊥篤尚堂	金	2
	水	2
	瀧	4
	安	4
	谷	2
	榮	2
	なし	0
	合計	33

表4 売弘願

売弘願と実際に出版された本とを比較している。冊数や合冊がかなり異なっていたことが分かる。1番右の列の冊数は、売弘願に書かれている数字で、2種類の書名が合冊されているものは0.5としている。

姓	刊本	冊	巻	売弘願番号	日付	刊本と売弘願での相違	冊
戊申 嘉永元	釋奠供物圖・諸寮雜事注文	1	2	285	嘉永 2.5	諸寮雜事注文	1
				292	嘉永 2.6	釋奠供物圖 (拵弓藤割次第と合冊)	0.5
	雜筆要集	1	1	285	嘉永 2.5		1
	春記	11	11	285	嘉永 2.5		11
	室町殿春日詣記	1	1	285	嘉永 2.5		1
	萬代和歌集	10	20	285	嘉永 2.5		10
	濱松中納言物語	8	4	285	嘉永 2.5		8
	乙寺縁起	1	1	285	嘉永 2.5		1
	拵弓藤割次第・諸鞍日記	1	2	292	嘉永 2.6	拵弓藤割次第 (釋奠供物圖と合冊) (諸鞍日記は掲載なし)	0.5
	九條家車圖	1	1	292	嘉永 2.6	(西園寺家車圖と合冊)	0.5
	西園寺家車圖	1	1	292	嘉永 2.6	(九條家車圖と合冊)	0.5
	前參議教長卿集	3	3	292	嘉永 2.6		3
	合計冊数	39					
己酉 嘉永 2	侍中群要	4	10	160	嘉永 3.10		10
	信實朝臣集	1	1	160	嘉永 3.10	兼澄集清慎集 (刊本にはない。信實朝臣集と合冊)	1
	草根集	15	15	160	嘉永 3.10		16
	繪師草紙	1	1	160	嘉永 3.10		1
	蒙古襲來繪詞	3	3	160	嘉永 3.10		3
	合計冊数	24					
庚戌 嘉永 3	三中口傳	3	3	207	嘉永 4.12		2
	今昔物語	22	10	207	嘉永 4.12		10
	忍音物語	2	1	207	嘉永 4.12		1
	合計冊数	27					
辛亥 嘉永 4	日本書紀	2	2	234	嘉永 5.9		2
	東大寺要録	10	10	234	嘉永 5.9		10
	風葉和歌集	4	4	234	嘉永 5.9		4
	今昔物語	4	2	234	嘉永 5.9		2
	合計冊数	20					



図1.  
「待中群要一二三」  
(上) 通し番号 153  
(下) 149 校正本

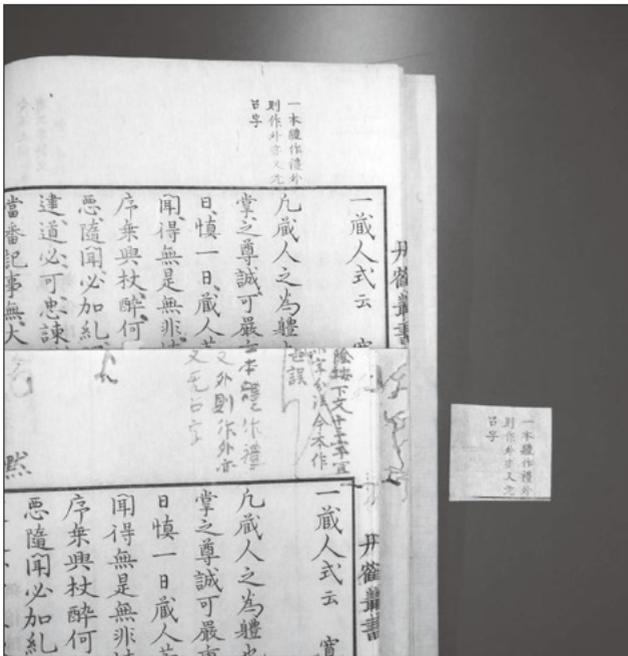


図2.  
「待中群要一二三」  
(上) 通し番号 153  
(下) 149 校正本  
下の校正本で記入された朱の箇所が、上の刊本では印刷されている。校正本で修正された部分は、刷りなおした紙片が上に添付される。この写真では、紙片は剥がれていたため、本の右側に置いてある。

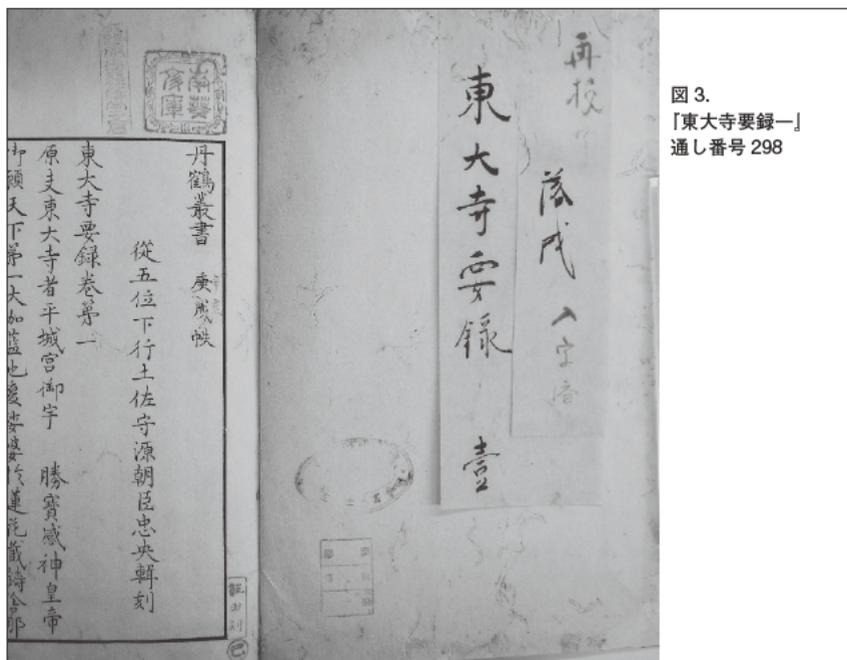


図 3.  
「東大寺要録一」  
通し番号 298

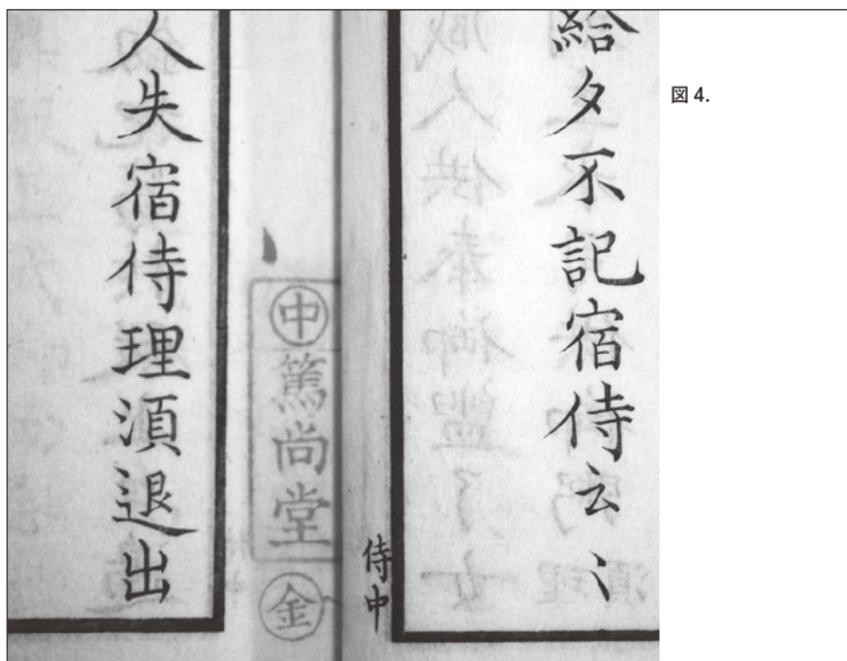


図 4.

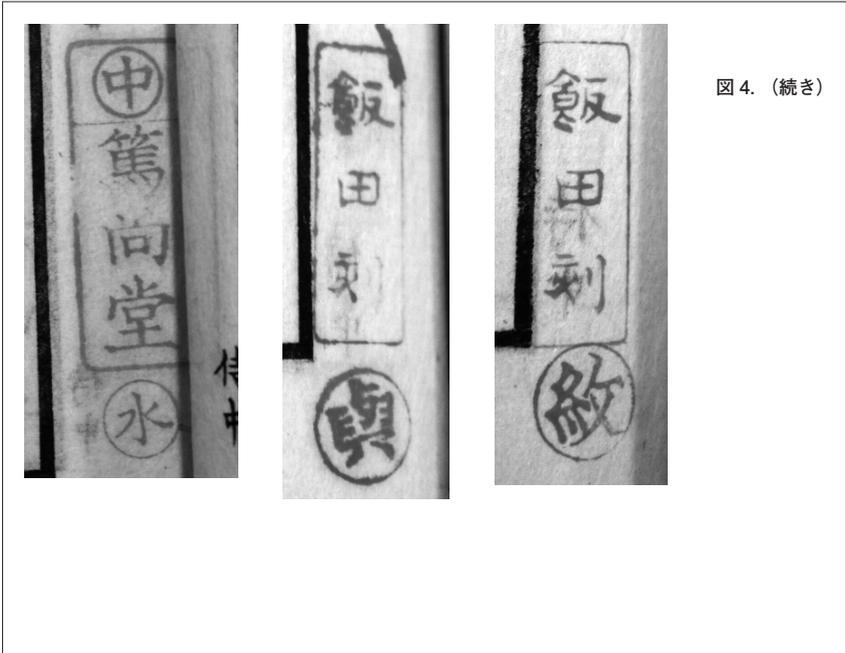


図 4. (続き)

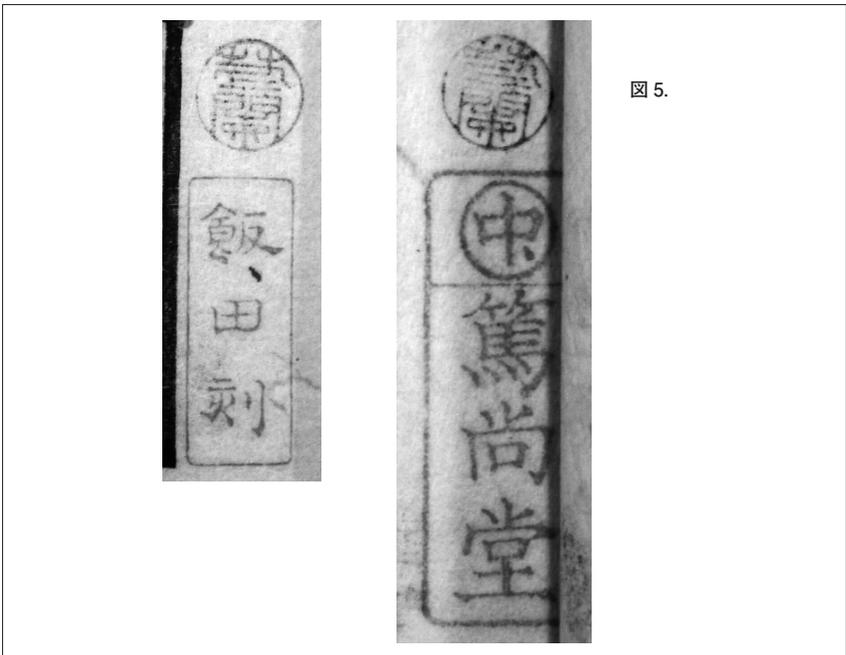


図 5.